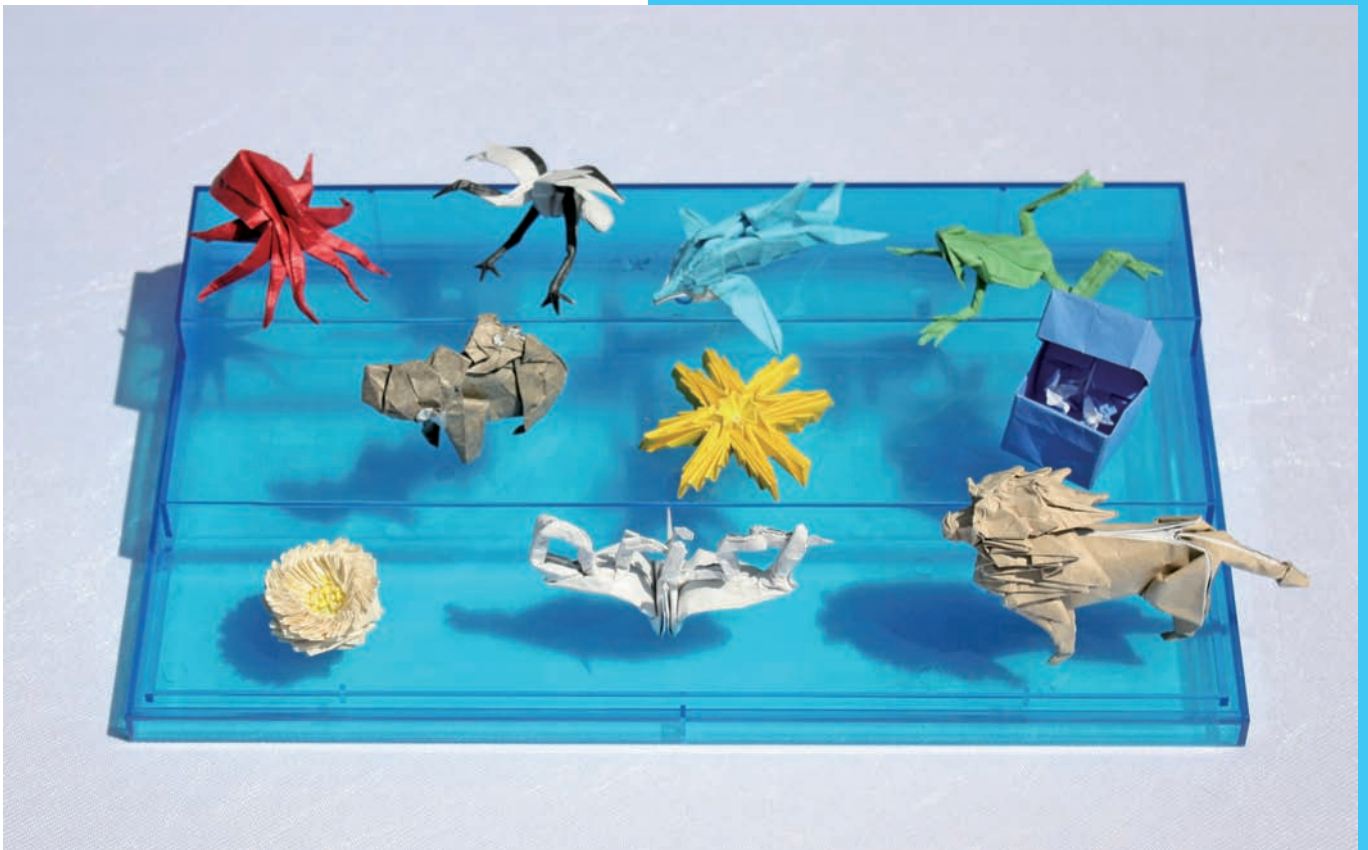


学内広報

for communication across the UT



特集：政策ビジョン研究センター 連載開始記念拡大版!!
原色『部局広報誌』図鑑

2009.9.17

No. 1390



わが国および国際社会が直面している課題に対し、東京大学が保有するリソースを駆使し、政策の観点から研究を行い、特定の政治的立場にとらわれることなく、ありうる政策の選択肢を追求し、それを社会に発信する。

ポリシーアート

Policy + alt

vol. 01

アルトが主旋律を奏でることは少ない。多くはソプラノが主役を演じている。アルトの音色は深い。主旋律を支え、メロディーに奥行きを与える。政策の議論に奥行きを与える、Alternatives = 政策の代替案も、これと同様である。

この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共にご紹介していきます。今回はその第1号ということで、特別に特集としてお送りすることにいたしました。日本では、大学がその研究成果を政策提言というかたちで、社会発信するセンターを持つことは、まだほとんどありません。東京大学が総長室直轄で始めたこの新たな試みに、是非ご注目ください。

政策ビジョン研究センター紹介
Policy Alternatives Research Institute

政策ビジョン研究センターは、以下のようなシンクタンク機能を持つ発信機関です。

▶ **東京大学の研究成果を活かした政策の選択肢の発信**

政策に関する提言をセンターが自ら発信するとともに、学内のさまざまな部局等による研究成果からアイデアを汲み上げ、政策の選択肢として社会に発信します。

▶ **多分野のネットワーク化による課題の探知**

多様な研究者を擁する総合大学の利点を生かし、多分野のネットワーク構築によって、それぞれの分野単独では発見できないような課題の探知とそれに対する総合的な解決策を模索します。

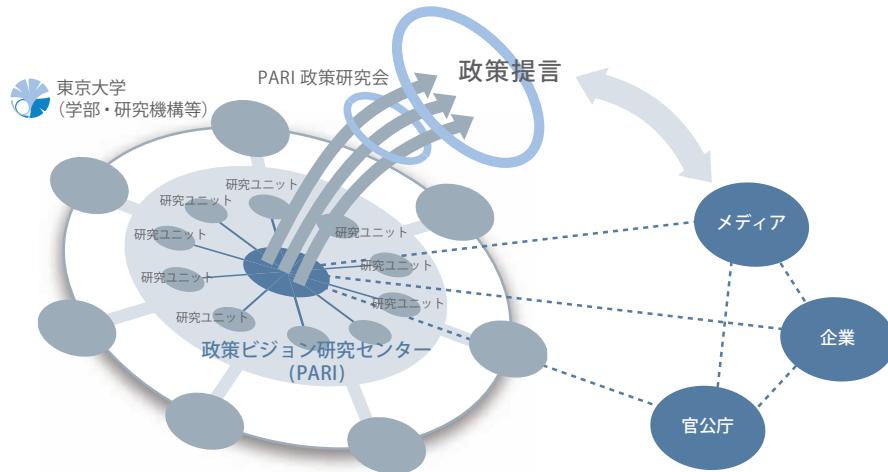
▶ **学内外の組織との交流による政策研究の活性化**

多角的な研究発信を行うために、学内の諸部局をはじめ、官庁、企業、マスメディア、NPO、その他の組織とネットワークを形成し、相互の交流と政策研究の活性化を図ります。

今後の掲載テーマ（予定）

- vol. 02 高齢者標準の社会
- vol. 03 一周年を記念して
- vol. 04 知的財産とイノベーション
- vol. 05 技術ガバナンス
- vol. 06 北東アジアの安全保障
- vol. 07 クリニカルデータ

政策ビジョン研究センターの仕組み



研究ユニット一覧

1. 北東アジアの安全保障研究ユニット
2. 知的財産権とイノベーション研究ユニット
3. 技術ガバナンス研究ユニット
4. 医療におけるIT政策研究ユニット
5. 再生医療政策研究ユニット
6. 生命・医療倫理政策研究ユニット
7. 航空政策研究ユニット

※この他、「ジェロントロジー」「海洋アライアンス」「食の安全（フードコミュニケーション）」等に関する政策課題を検討中

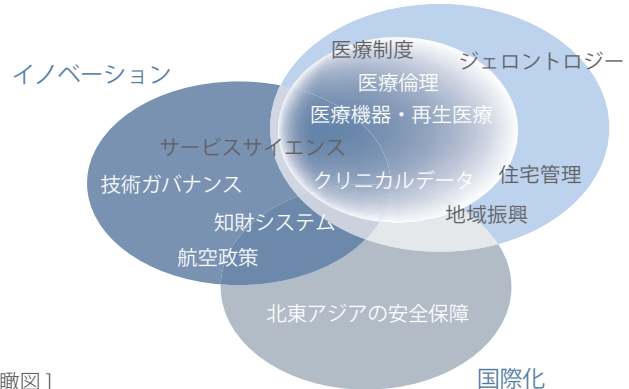
※ PARI = Policy Alternatives Reserch Institute / 政策ビジョン研究センター

医療・高齢化社会

Member

- 森田 朗 / Morita Akira センター長
- 坂田 一郎 / Sakata Ichiro 教授
- 秋山 昌範 / Akiyama Masanori 教授
- 新田見 有紀 / Nittami Yuki 特任研究員
- 小林 徹 / Kobayashi Toru 特任研究員
- 瀬川 友史 / Segawa Yushi 特任研究員
- 村上 壽枝 / Murakami Toshie 特任専門職員／企画担当
- 山野 泰子 / Yamano Hiroko 特任専門職員／広報担当
- 小林 範子 / Kobayashi Noriko 事務助手

[左上：政策ビジョン研究センター概念図 / 右下：研究ユニット俯瞰図]



「未来を創造する特許制度のための15の提言」

今年6月に東京大学・京都大学合同で開催しました、「特許とイノベーションに関する国際シンポジウム」において、「次世代知的財産権制度」実現のための改革課題として、「15の共同提言」を掲げました。また、これに関して、それぞれの提言に対する考え方と具体的対応を、ホームページ上で発表しています。政策ビジョン研究センターとしては、昨年7月にセンターが発足して以来、初の「政策提言」という形での社会発信になります。

《15提言に含まれる施策》(詳細は当センターホームページをご覧ください)

新時代のイノベーションを踏まえた制度・運用改革

- 1、サイエンスリンケージ拡大を踏まえた特許の質向上のための非特許文献に関する審査能力の向上
- 2、基礎的研究の成果の保護を簡便に可能にするための「仮特許制度」の導入
- 3、イノベーション促進の視点からの「適切な差止請求範囲」の明確化
- 4、「ライセンスオブライト」の導入による、知的財産権の積極的実施（ライセンス）の推奨
- 5、知財裁判審理における専門性の向上、短期的施策（専門調査官の充実等）と長期的展望（判事の専門性）
- 6、侵害裁判における特許の有効性判断に関し、技術専門官庁の知見を尊重する仕組みの導入
- 7、特許侵害とならない研究開発の範囲に関する国際的規範の確立
- 8、3Dインターネットに代表される近未来のニーズに対応した知財制度の国際共同研究の開始
- 9、産学国際共同研究契約のあり方に関する国際的な議論の場の設置
- 10、次世代の特許データベースの構築

国際協調の枠組み

- 11、仮想的な「世界特許」実現に向けた産学官の協調
- 12、特許審査ハイウェイ（PPH）の加速的推進とそのマルチネットワーク化
- 13、特許庁長官会合に合わせたアジア学術大会の開催

企業と大学（組織）戦略と特許

- 14、ユーザコミュニティ（企業・大学）による特許の「質」の向上の取り組み活動の活性化
- 15、パテントcommonsやパテントプールなど「コミュニティ全体の利害を考慮した協調領域」の設計と、即した特許の戦略的活用

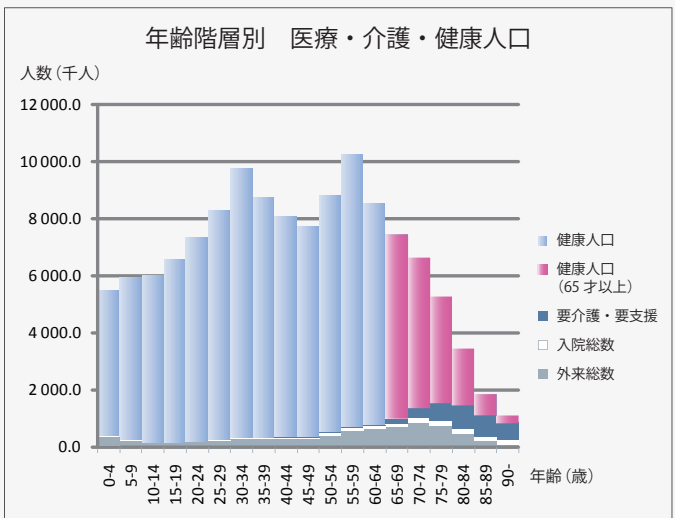
安心して暮らせる活力ある長寿社会の実現を目指して

～ 高齢化社会の「課題解決先進国」へ、提言の方向性を発表～

政策ビジョン研究センターでは、2008年10月に本格的に活動を開始して以来、7つの研究ユニットを立ち上げ、政策提言に向けて研究を進めています。

現在の世界は急速な経済情勢の悪化にみられるように、多数の深刻な課題に直面しており、それらにタイミングを失することなく取り組むことが必要です。科学的なエビデンスに基づく政策提言を行うことを使命とする政策ビジョン研究センターでは、鋭意それらの課題について提言の準備を進めております。今回はその第1弾として2009年1月に、わが国が直面している最大の、しかも長期的な課題である高齢化社会に関して、東京大学が行っている研究の成果の一部を、「政策提言の方向性」として発表いたしました。

少子高齢化、人口減少は、わが国の将来に大きな変化をもたらしますが、その課題は、多くの場合、増加する医療費や社会保障負担の問題、地域医療の崩壊の問題として論じられています。それに対しては、社会保障費の抑制や少子化対策、医師の増員等が主張されていますが、現在の仕組みや考え方を維持したままでは、状況が改善する可能性は少ないといわざるをえません。しかし、発想を変えると、わが国には、まだ利用されていない人的、



高齢者問題＝介護・医療問題とは限らない。例えば70代後半で71%、80代前半では57%が介護・医療を利用しておらず、健康な高齢者が多いことがわかる。(東京大学政策ビジョン研究センター作成 参考：平成17年国勢調査、厚生労働省平成17年患者調査、厚生労働省平成17年要介護認定者数)

知的資源が多数あります。視点を变えて、それらを活用するならば、「安心して暮らせる活力ある長寿社会」の実現も決して不可能ではないと考えます。

高齢者の増加は事実の問題です。少子化対策によって人口の増加を図ったとしても、高齢者数がピークを迎えるときに、人口バランスを回復させるほどの効果は期待できないでしょう。したがって、これからのわが国のあり方を考えるときには、高齢者の増加を前提として、すべての国民が「安心して快適に暮らせる社会」の姿を描いていく必要があります。

これまでは、65歳を過ぎ、企業等で定年を迎え、年金生活に入ると、「余生を送る」というイメージで捉えられてきた人生ですが、あと20年後には人口の3分の1が高齢者になり、多くの方が長生きするようになることを考えると、65歳以降の30年近い期間は、青年期や、中年期と同様、もしくはそれ以上に人生の充実した一時期と考えるべきだと思います。高齢者の就労機会の創出や社会への役割の果たし方も含めて、人生終盤のこの時期をいかに送るか、というライフサイクルにおける新たな生活のあり方を示すことが必要です。

上図は、65歳から85歳くらいまでは、実際には医療や介護を必要とせず、元気に暮らしているお年寄りが多くを占めている事を示しています。これからは、こうした比較的元気なお年寄りが、充実した生活を送ることができるような社会のあり方、すなわち、「高齢者を標準とした視点」を積極的に取り入れ、さまざまな世代の人たちが安心して快適に暮らせるコミュニティのモデルを創り出していく必要があります。

当センターでは、こうした考えの下に、東京大学で実施されている、高齢社会総合研究機構をはじめとする関連分野の研究成果を踏まえて、今後、医療福祉はもとより、交通、都市・住宅、地域コミュニティ、法的保護等の制度に関する提言を順次行っていく所存です。

● 高齢化社会に向けた政策提言の方向性

総論

- 目指すべき長寿社会像
- 21世紀型の解決策
- 重視する4テーマ
- 課題解決により生まれる結果

各論

医療の仕組みの再構築

- 「地域」「救急」「産科」崩壊の問題を根本的に解決—
- (1) 問題の正確な認識
- (2) 解決策の選択肢

医療情報の統合・活用の仕組みの創設

- 質の高い医療をいち早く提供する—
- (1) クリニカルデータ利用の現状
- (2) 統合・解析・活用によって生まれるメリット
- (3) 国内外の先進的な動き
- (4) 具体的な課題と解決策の選択肢

「再生医療」—先進医療を国民の元に早く届ける—

- (1) 我が国の再生医療の現状
- (2) 再生医療の実用化を妨げている壁
- (3) 解決策の選択肢

「ジェロントロジー」

- 70歳～80歳代の方々が快適に暮らせるコミュニティのモデルを世界に先駆けて作る—
- (1) 世界における高齢者コミュニティの現状と課題
- (2) 日本における社会コミュニティ作りの課題
- (3) 知の基盤としてのジェロントロジーの活用
- (4) 解決策の展望
- (5) 長期的な視点を意識したインフラ整備

東京大学政策ビジョン研究センターと産業競争力懇談会（代表幹事：勝俣恒久 東京電力会長）は、東京大学の有する広範・多様な学術の知見と産業競争力懇談会会員企業の有するビジネスの知見を融合させ、来るべき高齢化社会に向けたイノベーションと内需振興についての研究会を発足させることになりました。この研究会では、政策に関して、産学が協働する新たなアプローチを試みます。

現在は必ずしも顕在化していないとしても、健全な高齢化社会の実現に必要な、あるいは望ましい製品、サービス、インフラ、社会システム等について検討を加え、その普及・定着に必要な道筋を明らかにしつつ、政策提案を行います。このことにより、「高齢者を標準とした新たな社会像の創出」に資することが目標となっています。

高齢化に伴う課題としては常に医療及び年金に焦点が当たりますが、多くの健全な高齢者が安心して明るく生きていくこと（「アクティブ・エイジング」）に関する課題については、見逃されてきているものが多くあります。特に団塊世代が高齢者に仲間入りする時代が近づき、農村部に加えて都市部においても大規模な高齢者集団が出現することを考慮すると、若者・中年を標準にした社会から、高齢者を標準にした社会への転換、すなわちソーシャルイノベーションが期待され、その中で新たな製品・サービスを投入する余地が広がると考えられます。社会的に関心の高い重点テーマの検討からスタートし、将来的には、「活力ある高齢化社会の実現に資する基本法」のような枠組みの提案を目指しています。

● 研究会メンバー（50音順）

委員長 森田 朗 東京大学教授（政策ビジョン研究センター長）

東京大学からの参加

- 秋山 昌範 東京大学教授（政策ビジョン研究センター）
- 大江 和彦 東京大学教授（医学系研究科、医療情報経済学）
- 大西 隆 東京大学教授（先端科学技術研究センター、都市環境システム）
- 坂田 一郎 東京大学教授（政策ビジョン研究センター）
- 辻 哲夫 東京大学教授（高齢社会総合研究機構）
- 増田 寛也 東京大学客員教授（公共政策大学院）ほか

産業競争力懇談会（COCN）からの参加

NEC、鹿島建設、トヨタ自動車、日立製作所、富士通ほか

● 重点テーマ

1. 住宅・都市

日本の都市や住宅は、高齢者がアクティブに活動できる環境を提供しているとはいえない。都市については、垂直移動（階段など）の多い構造や、バリアフリーの不徹底（駅の中など一部のみバリアフリー化）など、住宅については、施設が自宅かという二者択一しかできない選択肢の狭さ、区分所有権法の問題などがある。

2. 健康・医療情報

大量の健康・医療情報（クリニカルデータ）を統合し、活用することができれば、医療の質の向上、新たな治療方法や薬の早期開発・普及、予防・健康サービスの開発に大きく貢献するものと考えられる。一方、現状では、それが、医療機関内部などに死蔵されている状況にある。どのようにすれば高度活用できるかについて、個人情報保護、医療に関する個人番号制度の導入なども含め議論を行う。

政策ビジョン研究センター スケジュール（2009年度後半）

研究ユニット等	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
北東アジアの安全保障		● 国際フォーラム		● 国際フォーラム			
知的財産権とイノベーション		● 東アジアイノベーションカンファレンス		● アジア知財会議 / 3極特許庁長官との産学官対話会議			
医療におけるIT政策		● PARI政策研究会（医療におけるIT政策）					● クリニカルデータ国際シンポジウム
航空政策				● PARI政策研究会（航空政策）			
高齢化社会		● 活力ある高齢化社会に向けた研究会〈毎月開催〉					
その他		● PARI政策研究会（市民後見人）		● PARI設立一周年記念フォーラム			● PARI政策研究会（鳥インフルエンザ対策）

ポリーアルト
Policy + alt vol. 01

お問い合わせ



東京大学政策ビジョン研究センター
Today Policy Alternatives Research Institute

Tel: 21708 Fax: 21709 (内線)
Email: pari@pp.u-tokyo.ac.jp

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>

特集

原色 『部局広報誌』 図鑑

本学の各部局が発行する広報誌は、なかなかの個性派ぞろい。今回はそんな部局広報誌を集めて特集してみました。題して「原色『部局広報誌』図鑑」。図鑑にしたいくなるほど部局広報誌はたくさんあるのです。ご存知でしたか？



インタビューに応じてくれた
T time!広報アシスタント。
写真・左から、西村さん、
郷原さん、北野さん

▶▶▶ contents

- 1 | 特別企画：編集スタッフインタビュー
- 2 | 私の『思い出深い記事』
- 3 | T time! の魅力と広報効果（大久保達也教授：広報室長）

T time!

工学部の

T=Technology

1 | 特別企画： 編集スタッフインタビュー

「T time!」は学生・院生が記者を務める広報誌。というわけで、さっそく広報アシスタントの皆さんにお話を聞きにいたしました。

—— まず「T time!」の編集方針、対象読者、発行部数などについて教えてください。

郷原 目的は「高校生や駒場生（1、2年生）に工学部の魅力を伝えること」。特に、駒場生には進学振分けの参考にしてほしいと思っています。発行部数は1万部程度で、全国の高校や予備校に配布しています。学内でも駒場アドミニストレーション棟や工学部各学科の事務所、スターバックス コーヒーそばのスペースなどに置いてあります。

—— 現場の制作の流れは？

北野 広報室長の久保先生の外に、「T time!」に携わる先生が毎月持ちまわりで決まっていて、その先生の学科を特集で紹介します。取材させていただき先生を決めて、次にインタビュアーを決めます。

西村 記事を書く人が1人。同行する人が1～3人というかんじですね。

—— 記事を書く際に、あるいはインタビュー現場で、心がけていることは？

北野 執筆で心がけていることは「解りやすさ」ですね。対象読者が高校生や駒場生なので、専門用語などをできるだけ噛み砕いて解りやすい言葉づかいにしようという心がけています。それから、誌面に関しては、図と写真を多用するようにしています。

西村 先生の講義資料などから、図やビジュアルを転載させていただくこともありますね。

2 | 私の『思い出深い記事』



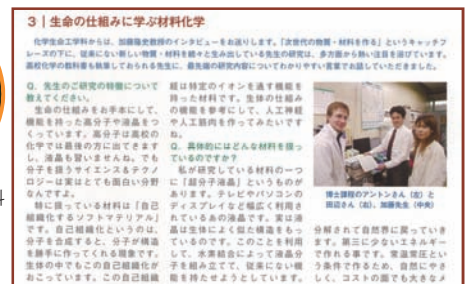
大学院工学系研究科
システム創成学専攻
修士課程1年
郷原浩之さん



室田一雄教授インタビュー (Vol.28)



大学院工学系研究科
社会基盤学専攻
修士課程1年
北野美紗さん



加藤隆史教授インタビュー (Vol.31)

E=Engineering

取材をしていて一番うれしかったことや楽しかったこと、何かありますか？

北野 話が盛り上がり3時間のロングインタビューになったことがあります。化学生命工学科の加藤隆史先生の取材だったんですが、とても良いインタビューでした。

郷原 私は応用化学科の橋本和仁先生から、先生が発明された「光触媒シート」をいただきました。ご自分の著書をくださる先生もいらっしやいます。そういうときは「やっていて良かったな」と思いますよ(笑)。

北野 私が書いた記事を読んで、進路(後期課程進学)の参考にしてくれた後輩がいました。それを聞いたときもうれしかったですね。

取材をしていて大変だったことや苦労したこと、失敗談など、ありますか？

西村 専門外の取材では「申し訳ないな」と思えるほど、自分の知識不足が浮き彫りになることがあります。また、原稿執筆で苦労することもありますね。先生がおっしゃった言葉を解りやすく言い換えたり、文章の長さを調整したりするのはけっこう大変です。

北野 失敗談といえば.....28号の学生座談会で、私は本音を話さずしてしまっ(笑)。記事を書く人が苦労していました(笑)。

それでは最後に、今後の展望や読者へのメッセージなど、あれば。

郷原 高校生・駒場生に学部の魅力伝えるのなら、つい最近まで進学振分けで迷っていた私たちが適役だと思います。良い意味で、「読者を迷わせる」誌面を作っていきたい。

北野 今後は「読み物」としての魅力を広げて本郷の学生にも読んでもらいたいですね。それから.....広報アシスタントになれば工学部全体が解ります。興味を持った方はぜひ、「T time!」制作に参加してほしいです。

工学部内のいろいろな人とお友達になれますから。

西村 よく言われている「T型人間(深い専門知識と幅広い分野に関する浅い知識を兼ね備えた人物)」になるためには、いろいろな活動に参加することが大切な気がします。皆さん、一緒に「T time!」を作りましょう!

ありがとうございました。

(9月1日 工学部調査室にて)



工学部
化学システム
工学科3年
西村 知さん



新井民夫教授インタビュー (Vol.32)

東京大学工学部
広報誌
Volume 30 | 2009.4

1 | 特別企画: 新入生の疑問に答えます
2 | 頑張れママさん研究者!
3 | 工学部内飲食店特集

1 | 特別企画: 新入生の疑問に答えます
4月になり、本郷キャンパスに吹く風もすっかり春めいてきました。今回はいつもとは趣向を変え、この春から工学部に進学する学生の皆さんやこれから工学部に進学する予定の皆さんの疑問に答えたいと思います。この春から工学部に進学した学生の代表として航空宇宙工学科の安部隆弘さんに疑問をぶつけてもらいました。

Q. 講義の雰囲気は駒場の時とどのように変わりますか?
駒場で多かったような大人数向けの講義はほとんどなくなります。学科単位の授業が主になり、先生方との距離も駒場の時よりは近づくと思います。同じ先生の講義を受ける機会も増えるので自分の所属する学科の先生方のことを覚えますし、逆に学生のことも覚えてくれます。講義の内容としては専門性が高くなってきますが、まだまだ専門の入門という感じですからそれほど構えなくても大丈夫だと思います。

Q. 4年生になり研究室に配属されるとどのような生活になりますか?
研究室に配属されると各自に卒業のテーマが与えられ、自分で研究を進めることが中心になります。講義の順位は研究室配属まである程度そろえていく人が多いと思います。研究室では自分の机が与えられるので基本的に朝学校に来たら研究室に行くといった感じになります。研究室によってはコアタイムといって何時から何時までは研究室にいらしようという時間が決められている場合があります。

Q. 卒業の出来が悪くて卒業できないということはないですか?
心配なくても少なくとも学部を卒業できないということは普通に通っていただければ無いと思います。というより頑張らされます。与えられたテーマが本当に答えるものなのかは誰にも分からないので「この方法ではダメでした」

Q. 本郷の周りの住環境はどうですか?
学校の周りは本郷三丁目駅以外にも地下鉄やJRの駅があり、立地条件の良さから家賃は高めですね。スーパーマーケットなどは横須賀や白山などに多くあります。今回の企画いかがだったでしょうか。不安の多いであろう新生活の参考にねばと思います。まだまだ疑問はあると思いますのでぜひ先輩に聞いてみてください。

新入生を迎える東京大学の春
とが「違うことが分りました」でも立派な結果であると言えます。もちろん研究室にまったく行かなくても卒業できるという意味ではありません。

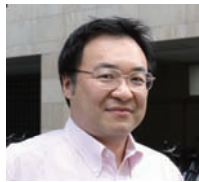
学校の周りは本郷三丁目駅以外にも地下鉄やJRの駅があり、立地条件の良さから家賃は高めですね。スーパーマーケットなどは横須賀や白山などに多くあります。今回の企画いかがだったでしょうか。不安の多いであろう新生活の参考にねばと思います。まだまだ疑問はあると思いますのでぜひ先輩に聞いてみてください。

安部隆弘(左)とインタビュー
伊興木 健太

The University of Tokyo | Faculty of Engineering | <http://www.t.u-tokyo.ac.jp/page/> | 1

誌名	T time!
部数	10000部
発行頻度	年6回
対象読者	高校生・駒場生

3 | T time! の魅力と広報効果



大久保達也
大学院工学系研究科・工学部 広報室長

学生・院生が作る工学部広報誌「T time!」が創刊されたのは2004年6月。平尾公彦研究科長(当時)の発案で、堀井秀之広報室長(当時)が立ち上げられました。当初は2~3名の学生スタッフが取材・執筆をしていたのですが、5年目を迎えた昨年からはメンバーが増え、現在では10名を越えるスタッフが精力的に媒体制作を行っています。学生の手によるインタビュー記事は教員が書く原稿とは視点が違っていて、私たちにとても大変おもしろい読み物になっています。またスタッフの学生たちにとっても、自らの視野

や人的ネットワークを広げる良いチャンスになっていると思います。

「T time!」は広報誌と銘打っていますが、その内容は工学部広報誌というよりは、むしろアウトリーチに属するものですね。今後もアウトリーチ活動としての更なる展開が予想されます。すでに彼/彼女らはオープンキャンパスなどで「T time!」イベント版とも呼ぶべき活動を行っています。近々、サイエンス・アゴラ(科学技術振興機構主催の科学コミュニケーションイベント)にも参加する予定です。

工学部広報室では、「情報伝達は主にHPで行い、紙媒体は読み物として作ってほしい」と考えているんですが、「T time!」はそのような広報戦略のひとつです。高校生・受験生・駒場生だけでなく、本郷の学生や他部局の教職員の方皆さんにも、ぜひ、読んでいただきたいと思っています。【談】

http://www.t.u-tokyo.ac.jp/tpage/public/t_time.html

オンライン版 <http://www.s.u-tokyo.ac.jp/gai/kouhou.html>

基礎科学をにない、継承する大学院理学系研究科・理学部は、ゆるぎない教育と世界最先端の研究成果を発信するため、理学部の教職員の手で広報誌をつくってきた。現在も理学系研究科と理学部の構成員をはじめとする学内外のより多くの人々に読んでもらえる“内容”づくりを力を入れている。最先端の科学用語の紹介、キャリアパス支援、理学部の歴史の再発見など特色ある連載を、ここ数年で次々とスタートさせている。

理学部ニュースは現在、7000部を隔月年6回発行している。配布先は研究科・学部内だけでなく、父兄、学内他部局や学外もカバーする。とくに理学系研究科の大学院教育には、新領域創成科学研究科、物性研究所、海洋研究所、地震研究所など、多くの学内他部局の教員が、協力講座として参加している。理学部ニュースは、こうした協力講座の教員およびその指導する理学系研究科の大学院生にも、もれなく送付されている。

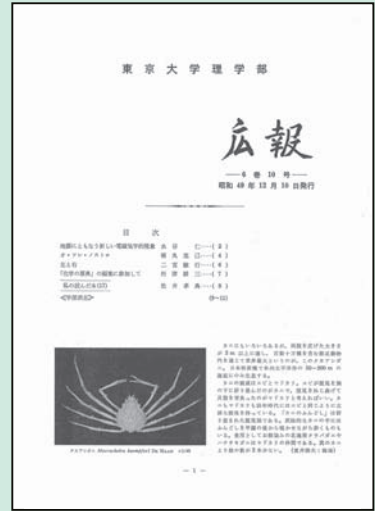
連載コラム「理学のキーワード」は、単行本「東大式現代科学用語ナビ」として化学同人よりこの9月、出版された。

表紙でたどる理学部ニュースの歴史



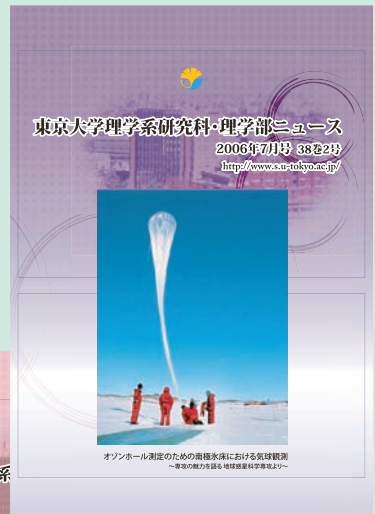
理学部に風を通そうと始まった。最初は月に2回発行された。

この年、安田講堂の封鎖解除が行われ、東京大学の入学試験は中止されている。編集は1年目を福島直先生、次の2年間を和田昭允先生、その次の1年間を塩田徹治先生が一人で担当した。編集委員は5巻より2名、7巻より3名、10巻より5名となる。2002年からは法人化に向け広報体制を強化し、広報担当職員をおき、編集に携わっている。



タカアシガニ(臨海実験所提供)表紙に写真が使われる。

南極オゾンホール気球観測



理学部ニュースってどんなもの？

特別記事
小柴先生、南部先生のノーベル賞受賞 など

理学系研究科の活動報告(過去) お知らせ(未来)

学位 人事異動 計報 受賞

最新の研究成果
研究ニュース (2005年～)
理学のキーワード (2006年～)

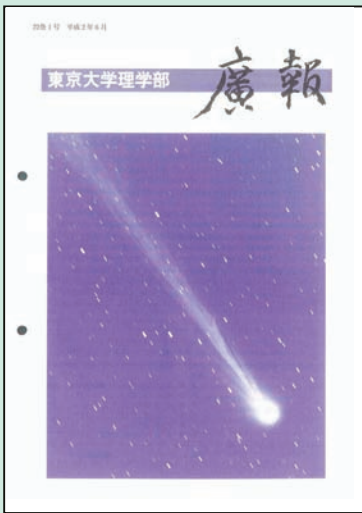
特色ある連載
科学英語を考える (2004年～2006年)
附属施設探訪 (2005年)
理学から羽ばたけ (2008年～)
発掘 理学の宝物 (2008年～) など

配付先
・研究科内
・学内外協力講座
・学生の父兄
・学内(本部・各部局)
・マスコミ・出版
・科学館
・予備校
・イベント時の配布
合計 7000部



宇宙の地図づくり「スローン・デジタル・スカイ・サーベイ」に用いる穴あき板

うまみの素(化学教室蔵)
1907年、池田菊苗教授は昆布からグルタミン酸ナトリウムを抽出した。化学調味料の元祖である。



オースチン彗星 (木曾観測所撮影)
表紙が二色刷りになる。



ボクセルの相互作用で生成したCG
タイトルに大学院の名前が入る。

誌名 理学部ニュース	部数 7000部
発行頻度 年6回	対象読者 教職員・学生・学外



小柴特別栄誉教授のノーベル賞受賞
「理学部ニュース」と
名前を改める。



世界最大の加速器 LHC の ATLAS 検出器
(素粒子物理国際研究センターなどと共同)
理学部ロゴ制定、表紙に採用。

植物園日光分園 オールカラー化



幕府献上魚図 (臨海実験所蔵)

マイクログラフィア (植物園蔵)

1665年発刊。コルク片を顕微鏡で見
て細胞 (Cell) を発見したロバート・フック
の著書 (初版)。アジアではこの1冊のみ。

コラム

理学部ニュース 40周年記念事業

創刊からの理学部ニュースを
すべて電子公開!

理学部ニュースは、今年の1月で
40年の節目を迎えた。とくに古い
号は理学部の歩みを知る上でたい
へん貴重な文献となるにもかかわらず、
理学部図書係に各1部が保存されて
いるのみであった。

そこで、理学系研究科広報委員
会は創刊からの理学部ニュースをす
べて電子化し、2009年6月5日 (金)、
大学院理学系研究科・理学部ホーム
ページ (http://www.s.u-tokyo.ac.jp/gai/kouhou_former.html) で公開し、
同時に、東京大学学術機関リポジトリ
(<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>) に登録した。

(大学院理学系研究科・理学部 広報室 加藤千恵)

連載コラム「発掘 理学の宝物」から



教養のあり方を問うて、五十余年



教養学部報(以下、学部報)と略記は、草創期の一九五一年に、矢内原忠雄初代学部長のもとで創刊され、現在まで五二二号を数えるユニークな駒場キャンパスの学内誌です。その目的は、学内のコミュニケーションを豊かにし、学生の教養に資することとされ、その内容は、学部の方針や意図の揭示、研究の最新情報の提供、学生の進路決定に役立つための後期課



山脇直司

程学部の紹介、新刊本や辞典の紹介、学内行事の案内など、多岐にわたっています。その編集は、各専攻から一名ずつ選出された教養学部報委員によってなされ、それを受けて、実質的に一人の専属スタッフによって刊行の作業が行われています。原則として、八月、九月、三月を除く第一水曜日に発行され、発行部数は約五千部で、駒場キャン

パス正門近くのボックスの中に置かれているほか、本郷キャンパスの各部署にも配られているので、誰もが容易に入手できるでしょう。学部報が他の学内広報誌と異なるのは、「学際性と国際性」という教養学部の学問理念を反映して、教養の意味や学問の根本理念を問い直すような内容を記事や、理系と文系を問わず学問の最先端を紹介する記事が、数多く掲載されることでしょう。このような学内誌は、世界でも稀ではないでしょうか。

今までのバックナンバーは、五年分をまとめた縮刷版が現在のところ九冊まで出ています。それは、教養学部の歴史だけではなく、その背景にある戦後日本社会の変遷についてもあれこれと想像力を駆り立てられ貴重なアーカイブとなっているので、関心ある方は、駒場図書館などで是非ご覧下さい。ちなみに、第一号のフロントページには、矢内原忠雄学部長の「創刊の辞」と

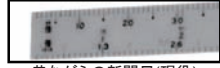


自己紹介号



東京大学教養学部

- 1面 教養学部報をご紹介します
 - 2面 教養学部報をもっとご紹介
 - 3面 教養学部報をさらにご紹介
 - 4面 教養学部報を重ねてご紹介
- <http://www.c.u-tokyo.ac.jp/gakuhon/>
gakuhon/



昔ながらの新聞尺(現役)

誌名	教養学部報
部数	5000~7500部
発行頻度	年9回
対象読者	学生・教職員

コーナーストーン

▼教養学部報には、学部報委員によるエッセイ「コーナーストーン」があります。これは「明暗」「一寸した」と「ヘリコプター」「赤鉛筆」と名前を変えつつ、続いてきた長寿コーナーで、時代を感じさせるトピックも満載です。そんなトピックのひとつをご紹介します。▼31号(一九五四年六月)に「故障したまま移設され五年間動かなかった一号館の時計が修理された」という記事が載っています。現在ならもともと早く修理するであろうと思われるのですが、当時はのんきなものでした。ちなみに、かの時計は「駒場の木偶」と呼ばれていたとのこと。当時、駒場七不思議のひとつに数えられていたそう。

教養学部報専属スタッフ(編集員)鈴木基美のコメント

原稿を編む側に長く居ります故、こうしてメ切りを意識する側に立つのは落ち着かないものです。学部報に触れると、駒場通にもなりますし、文理問わずおもしろい話を読むことができず。活字狂には天職ですね。いちばんの読者が名誉教授の方々というのはいささか気になります。誰よりも先に読める特権を味わいつつ原稿と格闘する日々を送っています。

・・*・*・*

いろいろお話ししたい編集裏話はあるのですが、昔から伝わっていることを。末尾の(英語)となるべき所属が(落語)となっていたこと、小見出しの「駒場」が「駒馬」になっしまった誤植など、今では笑い話になりましようが実際に起こったことと、冷や汗ものです。昨今では、つくりが似た文字でなく、変換ミスに悩まされます。このように、見た目には変化が乏しい学部報も、実は時代の流れに影響されているのです。

弥生

農学部の現在と伝統を語る、ビジュアル広報誌

大学院農学生命科学研究科・農学部



磯貝 明

大学院農学生命科学研究科・農学部 広報室長

農学生命科学研究科・農学部の教職員、大学院生・学部学生の幅広い活動を学内外に発信する手段の一つとして引き継がれてきたのが、読みやすくデザイン的にも完成度の高い広報誌『弥生』です。本研究科・学部の特徴である、幅広い研究領域、世界をフィールドとする研究対象、最先端の研究成果、様々な行政への提言、斬新で進化する教育システム、産官学連携の拡充、健康と安全の管理、職場あるいは

教育研究環境の整備、そしてこれらの活動と事務局、大学院生・学部学生との連携の姿を、図解も含めて分かりやすく紹介しています。

ご覧になるとお分かりになるように、各号での「学部長室から」のテーマと「表紙の高質な写真」、「Yayoi Highlight」、裏表紙の伝統を拓く「Tradition」の内容は、常に関連づけるように配慮されています。すなわち、各号でそれぞれ共通したストーリー・主張があり、関連する歴史を紹介しています。広報誌『弥生』は広報センター（本郷キャンパス 龍岡門横）や、農学部事務（農学部3号館1階）で無料配布しています。また、農学生命科学研究科・農学部のホームページからダウンロードできます。



Yayoi Highlight



Tradition

この3コーナーが運動!

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/pr-yayoi/yayoi.html>

誌名

弥生

発行部数

5000部

発行頻度

年2回

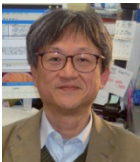
対象読者

学内外

創成

ユニークな研究を発信する、近未来的な広報誌

大学院新領域創成科学研究科



藤原 晴彦

新領域創成科学研究科 広報委員長

「創成」は、柏キャンパスの新領域創成科学研究科の広報誌で、2003年に創刊され、年2回の発行で現在14号まで刊行されています。当研究科は、昨年10周年を迎えた新しい組織で、基盤、生命(+情報生命)、環境という3つの研究系を中心とした大学院です。研究科及各研究系の活動の紹介に加えて、個々の教員の多様でユニークな研究内容を内外に広く発信することを目的に「創成」が創刊されました。毎

号の表紙には柏キャンパス内の建物や象徴的なモニュメントの写真を配し、カラフルな図表や写真を付した各記事も、凝ったデザインとともに読みやすいレイアウトになっています。毎号20ページほどの構成で、中心となる「Frontier Sciences」ではこれまで延べ60以上の研究が紹介されてきました。また新しい組織やプロジェクトの紹介記事も数多くありますが、その活動の軌跡を辿る「検証」は、他の広報誌では見かけないユニークな欄です。一方、大学院生や卒業生の活躍を紹介するコラムや、留学生の母国を紹介してもらう「留学生の窓」など、教員以外の紹介にも力を入れています。自然豊かでかつ発展するキャンパス近隣を紹介する「柏の風景」も心とむ欄です。



東京大学大学院 新領域創成科学研究科

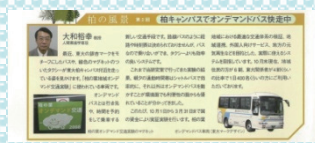
『創成』オススメコーナー



Frontier Sciences



留学生の窓



柏の風景

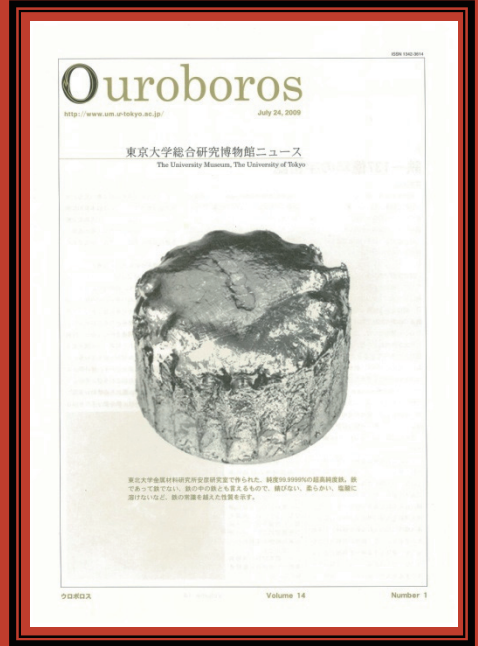
<http://www.k.u-tokyo.ac.jp/renewal/sousei/index.html>



佐々木猛智
総合研究博物館
准教授

ウロボロスは総合研究博物館の活動を紹介する広報誌です。主に展示と各研究室の研究活動について、担当教員と学内外の関係者が執筆します。例えば、展示物の紹介、展示を制作する過程の解説、展示デザインの方法、博物館の収蔵資料の紹介、フィールドワークの成果報告、研究上重要な発見の紹介などが主な内容です。ウロボロスを通読することにより、過去から現在にかけての博物館の活動を理解することができます。表紙には各号の発行時期の話題の画像が登場します。例えば、展示の特集号では目玉となる展示物が表紙に採用されます。多くの場合、ウロボロスは新規の展示公開に合わせて発行されます。展示は年間2〜3回入れ替えており、ウロボロスも年間2冊または3冊の発行です。

ウロボロスは冊子体を博物館の展示室で無料配布している他、インターネットでも全文を公開しています。博物館のトップページにウロボロスのマークがあり、それをクリックすると過去のすべての号の表紙が画面上に表示されます。さらに表紙をクリックすると目次が表示され、各記事にたどり着くことができます。冊子体は画像が白黒印刷になりますが、web版ではカラーです。是非ご覧下さい。



http://www.um.u-tokyo.ac.jp/web_museum/ouroboros.html

美しい表紙写真ラインナップ

誌名

ウロボロス

部数

5000部

発行頻度

年2〜3回

対象読者

一般



Volume 9/
Number 1



Volume 10/
Number 1



Volume 12/
Number 1

先端研ニュース

研究者が伝える、「先端研」のいま

先端科学技術
研究センター



誌名

先端研ニュース

部数

2000部

発行頻度

年4回

対象読者

研究者、企業関係者、
政策担当者等

先端研(先端科学技術研究センター)と聞いて、皆さんはどのような研究所のイメージをもたれるでしょうか。「世界的金融危機の行方」、「自然科学と国際政治との融合」、「America's Cupと富の創造」、「先端研でイスラム思想史を研究する」。これらはどれも最近の「先端研ニュース」に掲載された文章のタイトルで、先端研の研究者自らが執筆しているものです。少し意外な印象を持たれるかもしれませんが、「学際性」を研究モットーのひとつにあげる先端研にとって、本誌はその多様な研究内容やその背景などを研究者自身の言葉でわかりやすく伝える場となっています。といっても、全てを語るのではなくその一部をチラリ。先端研に関心を持っていただくきっかけ作りを目指しています。また、経営と研究の分離を掲げる先端研経営陣の思いや本音が率直に語られている

のも大きな特徴で、「『若齢化』問題」、「多様性が生み出す新規性」、「研究評価についての3分間テスト」更には「先端研が消える日」などこちらの内容も刺激的です。掲載内容は、若手研究者を中心に構成されている編集委員会(編集長:池内恵准教授)で検討されます。また、部数は2000部と限られていますが、発行と同時にウェブサイトにも全文掲載しますので、ダウンロードしてどなたでもご覧いただけます。

(神野智世子 先端研・コミュニケーションディレクター)

<http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp>

東大病院だより

東大病院150年の歴史もわかる!

医学部
附属病院

東大病院だよりは、平成5年に病院の諸問題を職員に正確に伝えることを目的として創刊された。

第1号は、ゼロックスコピーで4ページであった。その後、平成12年武谷雄二病院長の時に発行された第29号から現在のカラー印刷が開始され大変読みやすいものに改善された。それと共に編集の方針は職員だけでなく一般向けの東大病院の広報誌として病院が直面する問題、人事などの動きの他に、歴史等も取り上げるようになった。また普段見過ごされている四季の彩り(花鳥風月)を「東大病院の四季」として毎回紹介している。

現在の印刷部数は、2000部で部数は限られているが、外来診療棟1階総合案内と入院棟Aの1階ロビーで患者さんやお見舞いのご家族等にも配布しており東大病院ホームページにはカラー化以後のバックナンバーが掲載されている。現在本誌は、これまで東大病院だよりの編集にご尽力された加我君孝名誉教授(編集顧問)のご協力を得て、病院パブリック・リレーションセンターが編集を担当している。(パブリック・リレーションセンター)



誌名

東大病院だより

部数

2000部

発行頻度

年4回

対象読者

患者、教職員等

<http://www.h.u-tokyo.ac.jp/outline/letter.html>

部局広報誌 et cetra

～まだまだこんなにあります！！～



東京大学大学院法学
政治学研究所・法学部
ニュースレター
【大学院法学政治学研
究科・法学部】



多分野交流ニュー
ズレター
【大学院人文社会
系研究科・文学部】



科学の森ニュース
【大学院農学生命
科学研究科附属
演習林】



数理News
【大学院数理
科学研究科】



学環学府
【大学院情報学環・
学際情報学府】



医科研病院だより
【医科学研究所附
属病院】



東京大学地震
研究所ニュー
ズレターPlus
【地震研究所】



明日の東洋学
【東洋文化研究所】



生研ニュース
【生産技術研究所】



分生研ニュース
【分子細胞生物
学研究所】



ICRRニュース
【宇宙線研究所】



物性研だより
【物性研究所】



海洋研究所
ニュースレター
【海洋研究所】



図書館の窓
【附属図書館】



アイトーブ総合
センターニュース
【アイトーブ総
合センター】



環境安全
【環境安全研
究センター】



留学生センター・
ニュース
【留学生センター】



RACE News
【人工物工学
研究センター】



大総センター
ニュースレター
【大学総合教育
研究センター】



医学教育国際協
力研究センター
ニュース
【医学教育国際協
力研究センター】



Digital Life
【情報基盤センター】



CCSR News
【気候システム
研究センター】



東京大学史史料
室ニュース
【大学史史料室】



いかがでしたか？ こんなにたくさん部局広報誌があるなんて、ご存知ではなかった方も多いのではないのでしょうか。しかし、実は今回紹介したラインナップ以外にも広報誌は存在しています。たとえば、総長室総括委員会下の各機構の広報誌。それらも含め、そのうち、部局広報誌特集パート2をやりますので、お楽しみに！

NEWS

一般ニュース

海洋アライアンス

サンゴ州島の巡検隊、真夏の沖縄で島々を巡る

一般

海洋アライアンス（浦環機構長）の研究公募（イニシアティブ）に採択された「海面上昇に対する沖ノ島島の維持」の研究グループが、8月19日（水）～20日（木）にかけて沖縄に出かけてサンゴ州島の巡検を行った。

サンゴ礁の発達する海域には、サンゴ、有孔虫あるいは貝殻の遺骸などからなる州島が形成されることがある。ひと口に州島と言っても、環境条件に応じて、形成される場所も、形成に要する時間も、または島の規模についてもさまざまである。今回の巡検は、茅根創理学系研究科教授を代表とする前述の研究グループが、サンゴ州島の形成メカニズムを多角的に検討するために企画したものである。



サンゴ州島巡検隊の面々

本学の参加者は、茅根教授、磯部雅彦副学長、海洋ア

ライアンスの福島朋彦特任准教授、理学系研究科の中村修子さんと青木健次さん、教養学部の棚谷灯子さんである。本学以外からは、政府関係から2名、民間機関から11名の参加があり、合計19名の調査団となった。

8月19日（水）の10時、那覇港に集合した一行はチャーター船で那覇の南西12kmに位置する面積約1.6k㎡のルカン礁に向かった。穏やかな海を滑るように走る船旅はことのほか快適で、調査を忘れてしまいそうになるひと時でもあった。ルカン礁では、海岸工学を専門とする磯部副学長にお出まし頂き、参加者一同は人工構造物と砂粒の堆積の関係についてのレクチャーを受けた。

1時間ほどルカン礁を周回した後、渡嘉敷村の慶伊瀬島（チービシ）と呼ばれるサンゴ州島群に向かった。チービシでは、最も大きなナガンヌ島に上陸し、島の形状を確認したり、分布する礫のサイズから形成過程を推測したりと、興味深い時間を過ごした。やがて潮が満ち始めたところで船に乗り移り、神山島、クエフ島を遠目に見ながらチービシを後にした。



ナガンヌ島で海岸地形の解説をする磯部副学長（左から3人目）

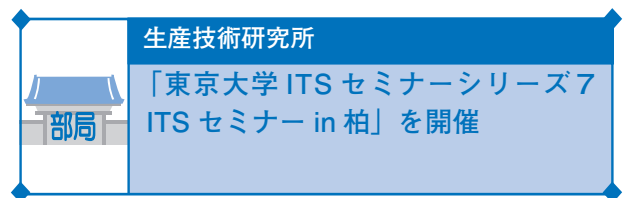
8月20日（木）は午前中に西表島に移動し、星砂の浜とバラス島で砂粒の観察を行った。沖縄の土産物としても有名な星砂は金平糖のような形をしているが、実は有孔虫の遺骸である。これらが広がる星砂の浜は少し赤みがかかって独特の趣がある。一方バラス島は沖合約3kmのところのところに形成された長径30m、短径5mぐらいの州島で（筆者の目測による）、やや大きめのサンゴ礫で形成されている。近くには見事なサンゴ群落が発達し、ダイビングスポットとしても注目される場所である。星砂の浜もバラス島も華やいだ雰囲気観光スポットであるだけに、作業着姿も混じった我々のグループは異様に映ったかもしれない。

調査を終えて部屋に戻ってから、調査結果の整理と意見交換を行い、サンゴ州島の巡検を締め括った。



宿に戻って巡検の締め括りを行う

わずか2日の巡検ではあったが、幅広い分野から参加があり、海洋アライアンスが目指す「研究領域に横串を刺す」を実践した試みであった。また公務多忙のなかご参加頂き、興味深いレクチャーを提供して下さいました磯部副学長には心より感謝したい。



7月13日（月）に柏キャンパスで150名を超える参加者を得て、標記セミナーを開催した。4月に発足した生産技術研究所先進モビリティ研究センター（センター長：桑原雅夫教授）が、センターの研究成果の社会還元と地域の産官学との連携・交流によるITSの普及促進を目的に、前身の先進モビリティ連携研究センター時代から開催しており、当セミナーは、第7回目を迎えた。今回の「ITSセミナー in 柏」は、東京大学の第3拠点の柏キャンパスの展開と、生産技術研究所先進モビリティ研究センター（ITSセンター）が主要な役割を果たす柏市の「ITS実証実験モデル都市」選定等、新たな「柏の葉国際キャンパスタウン」を参加者に紹介し、理解していただくことも目的であった。

当日は午前中に、UDCK 柏の葉アーバンデザインセンターで、前田英寿 UDCK 副センター長による「柏の葉キャンパスシティプロジェクト」の紹介とプロジェクトエリア内の施設を視察するバスツアーが行われ、続く第I部では、大和裕幸大学院新領域創成科学研究科長による「オンデマンドバス」の技術講演が行われた。

昼休みを挟み、午後は初めに、本多晃柏市長、大和裕幸研究科長、野城智也生産技術研究所長からご挨拶をいただいた。第II部では、桑原雅夫 ITSセンター長によるITSセンターの紹介と「ITS時代の交通管理と評価」、センター専任メンバーであり千葉実験所長の須田義大教授の「持続可能な交通システムー生産技術研究所におけるITS、LRT、PMVへの実践的研究展開ー」と池内克史教授の「ITS情報空間（現在、過去、未来）」、畠中秀人国土交通省国土技術政策総合技術研究所ITS研究室長の「実用化に向けたスマートウェイの取り組み」と題した技術講演が各々行われ、第III部では、堀洋一大学院新領域創成科学研究科教授による「いま電気自動車の周りで起きていること〜ちょこちょこ充電しながら走る電車のようなクルマへ〜」と題した基調講演が行われた。

第IV部のパネルディスカッション「活力のある魅力的な街作りに貢献するモビリティデザイン」では、モデレータにUDCK 柏の葉アーバンデザインセンター長で大学院新領域創成科学研究科の北沢猛教授、パネリストに、石黒博柏市企画部長、上田俊郎柏商工会議所専務理事、上野武千葉大学教授、河合淳也三井不動産株式会社柏の葉キャンパスシティプロジェクト推進部グループ長、畠中秀人ITS研究室長、須田義大教授が登壇した。魅力的な街づくりとそのために必要な交通・モビリティの在り方について、パネリストのプレゼンテーションとITSを活用した次世代型環境都市～ITSスマートタウン～の実現に向けたモーダルミックス、持続可能な交通移動システム、次世代モビリティの活用等に関する活発なディスカッションが繰り広げられた。

会場ではオンデマンドバス車両及び電気自動車の基幹部品であるキャパシタの展示も行われ、多くの参加者の見学と活発な質問があり、また、最後のパネルディスカッションまで多くの方々が参加され、参加者の関心の高さがうかがわれた。



本多晃柏市長によるご挨拶



参加者 150 余名を数え盛況となった会場

海洋研究所
海洋研究所一般公開を開催

海洋研究所は、恒例の一般公開を、7月18日（土）に中野地区で、海の日の7月20日（月・祝）に岩手県大槌地区の国際沿岸海洋研究センターで開催した。

中野地区の一般公開は、キャンパスが来年4月に柏へ移転するため、中野では最後のイベントとなった。早朝の小雨もやみ、終日30度の暑さとなる中、午前の来場者の口コミで午後からお越し下さった方も多く、1,400名を越える来場者を迎え大盛況となった。市民講座では、教員による「潮汐と気候」、「めだかをういた環境汚染研究」についての講演に続き、寺崎誠前所長より「中野キャンパスにおける海洋研究所の48年間のあゆみ」の紹介があり、近隣の方々への感謝のことが述べられた。展示企画では、海藻押し葉、タッチプール、ミニ水族館、ロープワーク教室、海洋研究所ツアー、化学や物理実験、海底の旅、紙芝居、星砂を探そうなど、子どもから大人まで楽しめる体験型の企画が数多く用意された。来場者から寄せられたアンケートでは移転を惜しむ多くの声とともに、来年、柏地区で海洋研究所一般公開があれば参加したいという回答もあった。今回の一般公開は、中野地区における海洋研究所の存在を強く印象付けるものとなった。



紙芝居「おにぎりとうみ」（中野地区）



星砂を探そう！（中野地区）



海藻を使ってお絵かき（中野地区）

大槌地区では、前日までの梅雨空が嘘のように晴れ渡り、この夏一番とも言える好天に恵まれた絶好の公開日和で開催され、例年並みの約1,200人の来場者で大いに賑わった。子どもたちに人気のタッチプール、海藻押し葉、釣り堀などの体験型企画をはじめ、希望者が多すぎて二手に分かれて行った所内施設見学ツアー、何度でも聴講したいとの感想があった講演会、見学者が途切れることのなかった調査船「弥生」の公開など、どの企画も盛況で、訪れてくださった皆様は楽しそうに過ごされていた。



大好評のタッチプール（大槌地区）



「弥生」には常に見学者が

医学部、医学部附属病院創立150周年記念モニュメント除幕式が開催される

医学部、医学部附属病院では、創立150周年記念事業「学生提案モニュメント公募企画」最優秀作品として、創立150周年記念モニュメントが医学部2号館本館前に完成したことにより、濱田純一総長をはじめ、本モニュメントをデザインした平野智子氏（医学部学生）ほか多数の関係者をお招きして、7月28日（火）13時から創立150周年記念モニュメントの除幕式を挙行了した。

除幕式の開催にあたり、清水孝雄医学系研究科長より、開式の辞として関係者への謝辞が述べられた。また、濱田純一総長からは、本モニュメント完成にあたってお祝いの御挨拶をいただいた。

引き続き、モニュメントの除幕が行われ、列席者から盛大な拍手をいただいた。除幕後、中村耕三教授（記念モニュメント実施計画担当）並びに平野智子氏から挨拶があり、最後に医学部2号館本館をバックに全員で記念撮影が行われた。このモニュメントが「明日の医学と医療を拓く」をシンボルとして存続することを祈念して、除幕式は終了した。

本モニュメントは、二人の人が向き合い、手を取りあい、ひとつの球を支える像で、正面から見ると、全体としてMedicineの「M」を象っており、手を取りあう二人の人は「医師（医療従事者）と患者」「医学部と医学部附属病院」「教育と研究」とその協調関係を表現している。



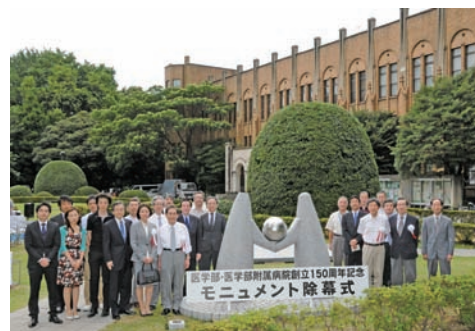
創立150周年記念モニュメント銘板



創立150周年記念モニュメント除幕



平野智子氏挨拶（医学部学生、モニュメントデザイナー）



記念撮影

留学生センター

「集中日本語コース・学術日本語コース」2009年度夏学期修了証書授与式が行われる

留学生センター「集中日本語コース・学術日本語コース」の2009年度夏学期修了証書授与式が、7月31日（金）15時30分から、医学部教育研究棟13階第6セミナー室で行われた。

両コースとも4月に開講し、「集中日本語コース」は初級（日本語未習者）から上級まで7つのクラスに分かれて、また、アカデミックジャパニーズの習得をめざす上級者用の「学術日本語コース」は2つのクラスに分かれて日本語の学習を続け、合計73名が所定の課程を修了した。



集合写真

式には、留学生担当の小島憲道理事（副学長）、修了者の指導教員でもある田中明彦理事（副学長）ほか来賓の先生方と、センター関係教職員、修了者が出席した。小島理事（副学長）の挨拶に続き、坂野仁留学生センター長から修了者一人ひとりに修了証書が手渡され、次いで、日本語教育部門主任の菊地康人教授からクラス別の講評が述べられた。

続いて、修了者を代表して、サウ・デベンドウラさん（インド・初級代表）、ベフオチル・ダワープレブさん（モンゴル・中級代表）、ウドヴィク・ヴィオレッタさん（ウクライナ・上級代表）の3名から日本語によるスピーチがあり、約4か月間の日本語のすばらしい上達ぶりが披露され、和やかな雰囲気の中に式は終了した。

式終了後、引き続き、山上会館にところを移して懇談会が行われた。小島理事（副学長）は懇談会にも出席し、修了者達と懇談し、ねぎらいの言葉をかけられた。修了者たちは、教員を囲んで記念撮影をしたり、日本の歌を歌ったりして、楽しい時を過ごし、別れを惜しみつつ閉会となった。

なお、今期の修了者73名の所属・出身は、以下のとおり12研究科等、35の国または地域である。

研究科等（12研究科等）

法学政治学研究科	3名
医学系研究科	8名
工学系研究科	13名
理学系研究科	4名
農学生命科学研究科	6名
経済学研究科	1名
総合文化研究科	5名
教育学研究科	2名
数理科学研究科	1名
新領域創成科学研究科	8名
情報理工学系研究科	9名
学際情報学府	13名

国または地域（35カ国・地域）

・ブラジル	8名	・チリ	1名
・韓国	7名	・ドミニカ共和国	1名
・タイ	7名	・エジプト	1名
・台湾	4名	・アイルランド	1名
・バングラデシュ	3名	・マダガスカル	1名
・中国	3名	・メキシコ	1名
・ドイツ	3名	・モンゴル	1名
・インド	3名	・モロッコ	1名
・インドネシア	3名	・ネパール	1名
・ミャンマー	3名	・パキスタン	1名
・アルゼンチン	2名	・フィリピン	1名
・キューバ	2名	・シンガポール	1名
・フランス	2名	・スペイン	1名
・アメリカ合衆国	2名	・スーダン	1名
・アフガニスタン	1名	・タンザニア	1名

・アルメニア	1名	・トルコ	1名
・オーストラリア	1名	・ウクライナ	1名
・ベルギー	1名		



修了証書の授与



修了者代表サウ・デベンドウラさんのスピーチ

医学部附属病院

医学部附属病院検診部で子ども見学デーが開催される

医学部附属病院検診部で、8月26日（水）9時から、文部科学省の取り組みとして実施するプログラム「子ども見学デー」が開催された。

当日は、小学2年生から中学3年生の18名の子ども達とその保護者が参加し、山崎力検診部長からスライドを見ながら人間ドックについての講演を聞いた。その後実際に上部消化管内視鏡（模型）の操作や心エコーを行い、内科診察や脳神経についての説明を受けた。また、各自、呼吸機能、眼圧、眼底等の各検査を体験型ウォークラリー形式で回りながら結果表を作成した。

当院の検診部は、今年の7月に開設2周年を迎えたことから、人間ドックについて一般の方に広報する機会を得た。

子ども見学デーは、子どものいきいきした表情とともに盛会のうちに12時前に終了し、参加者からはすばら

しい企画であったとのご感想を頂いた。



聴診体験で自分の心音を聴く子ども達



子ども見学デー参加者と検診部スタッフ

医学部附属病院



新型インフルエンザ対策に係る検査業務の協力者に対し、舛添厚生労働大臣から感謝状贈呈

8月27日（木）11時から、新型インフルエンザ対策に係る検査業務協力者に対する大臣感謝状の贈呈式が厚生労働省大臣室で行われた。

感謝状は、検査業務の応援及び停留施設等について尽力した団体及び個人の方々を代表する者に贈呈された。本院については、検査業務の支援を行った国立大学法人5大学病院（筑波大学附属病院、千葉大学医学部附属病院、東京大学医学部附属病院、京都大学医学部附属病院、九州大学病院）を代表して武谷雄二病院長と、本院の医師・看護師を代表してアレルギー・リウマチ内科 関谷剛医師へ、舛添要一厚生労働大臣から感謝状が贈呈された。

本院は、新型インフルエンザの発生による成田空港での検査強化について、文部科学省を通じて厚生労働省から派遣要請があったことに対応し、5月22日（金）までの間、医師12名、看護師4名が協力した。



感謝状贈呈式の様子



贈呈された感謝状

あなたの撮った写真を 学内広報に載せませんか？

学内広報では教職員の皆さんが撮影した写真を募集します。あなたも自らの写真の腕を学内で披露してみませんか？

■応募条件

1. 東大のキャンパス内で撮影した写真であること

本郷に限らず、東大の敷地内ならどのキャンパスでも可。また、キャンパス内で撮った写真であれば、風景写真でなくても可。人、動物、モノが写った写真でもかまいません。

2. デジタルデータで送付すること

撮影はデジタルカメラ、あるいはカメラ付き携帯電話で行い、デジタルデータ(jpeg、tifのいずれか)をメール添付で送ってください。

3. 1回の応募につき3枚まで受付

多量の写真データ送付はご遠慮ください。
(添付ファイルの合計要領は5MBまで)

■掲載基準&掲載方法

学内広報編集スタッフが独断と偏見に満ちたセレクション(笑)を行い、スペースの空いたページに掲載します。掲載の際には、「作品名」と「撮影者」のクレジットを記載します(匿名希望も可)。また、良い写真が多数集まった場合は、応募写真を紹介する特集、応募写真を紹介する連載なども予定しています。

■締切

特にありません。良い写真が撮れたら送ってください。

■送付先

本部広報グループ広報企画チーム
「学内広報写真募集係」まで。

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

INTERVIEW

高齢社会総合研究機構
鎌田 実 機構長

今月ご紹介するのは、3年間の寄付研究部門としての活動を経て、今年4月に機構として発足した「高齢社会総合研究機構」です。超高齢社会にどのように向き合いか、様々な側面から提案を発信しようとしている、注目の機構です。発足から4ヶ月、新たなスタートを切った高齢社会総合研究機構の鎌田機構長に、お話を伺ってきました。

Q. 発足から4ヶ月、手応えはいかがですか？

鎌田 元々、ジェロントロジー寄付研究部門として3年間活動しており、その成果を踏まえて学内の恒常的な組織として、再スタートを切った形となります。超高齢社会の課題解決には、これまで工学・医学・法学・心理学など領域別に研究されていた知を集結し、学際的に課題解決に取り組む研究体制の構築が必要です。様々な分野の教員が集まるので、このような複雑な問題へのアプローチの仕方が多岐に亘るといふメリットがあるのと同時に、価値観や手法が違うので、異分野の教員同士が理解しあうには努力も必要です。ジェロントロジー寄付研究部門時代に築き上げてきたネットワークの土台や経験を活かして、より強力な研究体制を作り上げていきたいです。現在、3名の専任の教授(特任教授1名含む)に加え、25名の機構運営委員、50名を超す若手も含む協力教員がおります。産学連携・社会連携・国際連携を三本柱として掲げ、研究体制も確立しつつあり、運営委員会とその中にある執行委員会を定期的に開催して、機構の方向性や重要事項について話し合っています。研究教育体制としては、非常に順調に進んでいると思っています。



Q. 三本柱のそれぞれの進捗状況は？

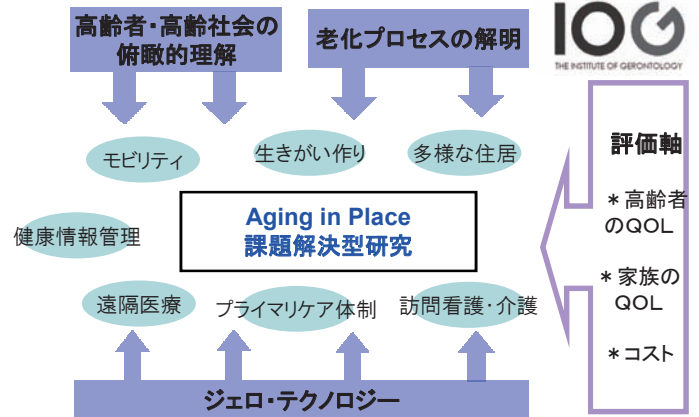
鎌田 社会連携は、“Aging in Place”(住み慣れた街で安心して自分らしく老いることのできる社会)というキーワードを掲げ、30年後の超高齢社会に向けた地域モデルを作ることを目的としており、福井県と千葉県柏市と連携して社会実験型研究を行います。

福井県では、限界集落の今後の予測や、匿名化した医療データを提供いただいて分析することによって、医療・介護サービスを受けている高齢者の現状の把握と、今後のシミュレーションを行います。他には、車の運転を断念するタイミングと断念後の移動手段の検討や、就労・就農など生きがい作りをテーマとした研究を行っています。今後は地域と東大が協同して、30年後の超高齢社会のまちづくりのモデルを作りたいと思っています。

千葉県柏市は、その一歩を踏み出しました。柏市とUR(都市再生機構)が進めている、市内の豊四季台団地の建て替えに合わせてまちづくりの研究をするべく、7月に、柏市・UR・本学の三者で研究会を立ち上げました。我々は特に、在宅医療・訪問看護・介護システムを連携させて、地域に埋め込むことが重要だと考えています。すでに、団地敷地の一部に特別養護老人ホームを誘致することが決定しています。いずれこの研究会には、地域住民や地域の医師会・看護師会などの関係団体にも加わっていただき、協議会のような形で将来の姿を議論し、一緒に街を作り上げていけたらと思っています。また、柏キャンパスの中には総合医(かかりつけ医)の育成だけでなく、看護・介護、またそれを支える医療・介護機器の開発など工学的教育研究を行う、在宅医療・訪問医療の総合的拠点を建設する予定です。

総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>



産学連携は、産学連携本部が実施しているコンソーシアム事業に全面的に協力しており、月1回のペースで産業界と議論を行っています。産業界との連携というと、我々が一方的に講義をするような形式になりがちです。しかし、この事業では、産業界の方々に超高齢社会の将来像などを語っていただくようにし、その上で2～3年後の利潤に目がいきがちな産業界の方の目線を、20～30年後にも向けてもらえるように対話をしています。超高齢社会の課題解決は、大学だけで出来るものではなく、産業界が担う部分が非常に大きいので、企業の長期的な戦略を作る上で大学の知識や技術を使って欲しいという思いで、産学連携を推進しています。

国際連携には、これから力を入れていきます。アメリカはジェロントロジー研究の先進国ですので、そこに博士課程の学生を留学させるプログラムを実現できたらと思っています。また、日本に続いて韓国やシンガポールはこれから急速に超高齢化社会に向かっていくでしょう。日本は、アジアで最初に超高齢社会に突入する国として、モデルを示さなくてはなりません。今年の10月には、韓国で国際シンポジウムを開催する予定です。このように、国際的ジェロントロジーネットワークの構築・参加を積極的に行っていきます。

Q. 今後の抱負は？

鎌田 福井県と千葉県柏市での社会実験型研究で成果を出すことがまず第一です。これには、地域住民にとって住み良いまちづくりをすることだけでなく、在宅医療のできる総合医の育成など、教育に係る部分も含まれます。また、現在は3人の専任教授がスクラムを組んですべてのプロジェクトに係わり、推進メンバー・協力教員と共に動かしていますが、徐々に役割分担をし、より効率的にしたいと考えています。さらに、寄付研究部門時代から行っている学部横断型教育プログラム(学部生を対象)を継続し、ジェロントロジー学に興味をもつ学生を増やし、この分野の底上げをしていきたいと思っています。

2030年には、人口の3人に1人が65歳以上になると言われ、70歳以上の人口は今の2倍(2000万人程度)になると予測されています。現在の社会システムを見直し、高齢者が安心して生きがいを得ることの出来る社会の実現に向けて、産官民と連携して活動を続けていきたいと思っています。

(インタビューア:近・野村)

●関連ホームページ● <http://www.iog.u-tokyo.ac.jp/>

問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ(内線21385)

実際の現場で見て、聞いて、考える研修制度を実施

TLF(テクノロジー・リエゾン・フェロー)研修に同行しました



橋本征利サッポロビール㈱千葉工場長に質問をする第10期TLFのみなさん

8月下旬の夕方、サッポロビール㈱千葉工場で、橋本征利工場長は矢継ぎ早の質問を受けていました。質問者は各地方自治体から産学連携本部に派遣されている第10期TLFのみなさん（TLFの解説は右側）で、研修の一環として工場視察にやってきました。通常の見学とは違い、直接工場長に話を伺うことができるのもTLF研修ならではのメリットです。TLFのみなさんに工場視察の感想を聞いたところ「大麦・ホップの品質保証システムがドイツ連邦栄誉賞の金賞をとった実績があり、品質にこだわる姿勢がすばらしいと思いました」「工場が高度にオートメーション化されていて、少ない人数で効率よく仕事をしていることに驚きましたが、地域への工場誘致と、それによる雇用の創出という立場からは少し複雑に感じました」「ビール缶の上蓋を数ミリ小さくしてアルミ使用量を減らしたり、包装をできるだけ簡素化したりするなど、経費節減とエコに限界まで挑戦しているところは自治体の立場からも参考になりました」という意見がありました。

TLF研修制度とは?!

自治体等公的機関の職員を対象とした、大学・産業界・官公庁との間の産学官連携を推進・管理する専門家の育成のための東京大学の研修制度。受講料無料。一年間の常勤派遣。事務官、技官のいずれも可。現在までに全国の29自治体から計59名の職員が研修。修了生は「東京大学地域振興研究会」を組織し、東京大学を核として継続的に地域振興のために活動を続けている。

【TLF研修の内容】

豊富な実績を持つ産学連携本部教員やそれぞれの分野の第一線で活躍する内部・外部講師による講義・見学のほか、共同研究創出実務や東京大学教員へのインタビューを通じて産学連携に向けた提案テーマを発掘するなどのOJTによる教育を行う。

①講義・見学

- ・産学連携に関連した各種基礎知識の習得
- ・先端的な関連知識の習得
- ・地域振興に関する知識の習得ほか
- ・学内外各種機関の訪問（日産自動車㈱追浜工場、ソニー㈱厚木第2テクノロジーセンターなど）
- ・公設試験所・研究所の訪問と意見交換

②OJT

- ・東京大学の産学連携創出スキームのOJTによる産学連携実務の習得（教員インタビュー、産学連携提案データベースの構築・公開スキル習得など）

Column

東大発ベンチャー企業におじゃましま〜す!

本郷キャンパスアントレプレナープラザ7Fにある研究室を訪れると、入り口にある大きな藻培養装置（写真左下）が目に入りました。この装置でユーグレナの培養にどの条件が一番適しているか、日々実験されているそうです。

株式会社ユーグレナは、ユーグレナ（ビタミン・アミノ酸など人間が必要とする微量栄養素を豊富に含む光合成微生物）の研究開発、製造、販売などの事業を行うベンチャーです。石垣島に設置された屋外プールでユーグレナを大量培養することに世界で初めて成功しました。大量培養したユーグレナは、パウダー化され、サプリメントや化粧品として商品化されています。研究開発を手がけ、ユーグレナ大量栽培の第一人者である鈴木健吾取締役は「ベンチャーを立ち上げたことにより、自分の研究成果が社会還元しているんだと感じます。個人で事業をするよりも、組織になったほうがより大きいことができますね。リスクもありますが、ベンチャーを研究者のアピールの場としてとらえてもいいのではないかと考えています」と話されました。ユーグレナで、世界の環境や食糧問題を解決したいという夢をもつ社員のみなさんの顔は生き生きとしていました。

株式会社ユーグレナ

代表取締役社長：出雲充

本社：東京大学 アントレプレナープラザ7F

設立：2005年8月 資本金：2億1,500万円 URL：<http://www.euglena.jp/>

事業内容：ユーグレナの研究開発・製造・販売・環境ビジネスへの応用ほか



写真左上：電子顕微鏡で撮影した「ユーグレナ」。写真左下：藻培養装置で培養の実験をする様子。写真右：出雲充社長（下段中央）と、研究開発担当の鈴木健吾取締役（上段左上）を囲む株式会社ユーグレナのみなさん

連絡先：産学連携本部（本部産学連携グループ）
電話：内線22857（外線03-5841-2857）
WEBサイト：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



戦争と科学リテラシー

岡本拓司
総合文化研究科 准教授
科学技術インタープリター養成プログラム担当

第二次世界大戦終わり頃の日本の新聞を読んでいると、すでに1945年8月以前から新型爆弾や原子爆弾といった言葉が使われていたことに気づく。もっとも原子爆弾は、言葉だけならばH. G. ウェルズの小説「放たれた世界」(1928年)やアガサ・クリスティーの戯曲「ブラック・コーヒー」(1930年)にも現れ、日本でも、前者を読んだ寺田寅彦が、1929年の随筆の中で「原子爆弾」という語を使っている。

敗戦直前の日本の「原子爆弾」はもっと現実味があり、これはドイツの開発しようとしている新兵器であって、日本にも専門の近い仁科博士や湯川教授がいると紹介されている。いくつかの回想を読むと、気のきいた軍国少年であれば、原子核研究の最先端を担う物理学者が日本にいて、いずれ起死回生の新兵器を開発すると考えていたらしいことも窺われる。実際にはドイツや日本がこの新兵器を使うことはなく、日本の場合にはそれが初めて使われた国になってしまったのであるが。

鉄砲から放たれる銃弾は放物線を描く。日清戦争でも海戦ですでに数千メートルを越える飛距離をもつ大砲が使われていたから、これくらいになるとコリオリ力も考慮しなければ弾はあたらぬ(考慮してもあてるためにはさらに高度な知識が必要らしいが)。物騒なことをいうようであるが、命の関わる戦争が身近にあったころ、兵器の原理を理解することを通して軍国少年たちの得た科学的な知識は、かなり高度なものであったように思われる。

科学リテラシー向上のために戦争をするわけにはもちろんいかないが、考えてみれば科学リテラシーの低下を嘆いていられる時代は平和なよい時代なのかもしれない。しかし、隣国が地下核実験に成功し、長距離弾道ミサイルも製造しているというのであれば、それを話題にする際に、核分裂の原理や、弾道ミサイルの「弾道」の意味を解説する程度のことはあってもよいと思う。隣国の脅威を強調しすぎるのが不適切であれば、毎年8月6日と9日に原子爆弾の悲惨さを再確認する際に、その悲惨さをもたらした爆弾の原理についての説明を加えるのもよい。世界唯一の被爆国であるならば、小学校1年生からその程度の知識をもっているのも不思議ではない。敗戦直後、科学の力の前に敗れたと反省した人々は、未来の日本をそのような国として構想していたように思う。

★科学技術インタープリター養成プログラム
URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

めざすは、コストと業務のシェイプアップ!?

本部調達グループは、UT購買サイトなどの調達改善を企画・立案する調達企画チーム、政府調達や全学的に共通性が高い契約を行う集中調達チーム、旅費・謝金業務を行う旅費チーム、そして私の所属する、その名のおり本部内の調達を行う本部調達チームがあります。

原則、この業務のはず...ですが、そこは本部調達グループ。集中調達チームが行う政府調達やその他グループで受ける業務が、ときどき天から慈雨(!)の如く降ってきます。また、本郷地区の粗大ゴミ処理や機密文書のシュレッダー処理も担当です。これまで部局、外部機関と本部以外の場でお仕事をしてきましたが、実際にやってみると、本部調達の業務は興味深い一方で難しくもあります。調達業務は、“よい”ものを“安く”かつ“公平に”手に入れる、または、ある事業が“安く”かつ“適切に”行われることのバランスを考えなくては いけません(安かろう悪かろうではいけないのです...)。何が「適正」な金額なのか、日々勉強の毎日です。また、全学的に進める事業に参加することもあります。現在、私がWGで参加しているのは、「ノートパソコンリユース事業」。みなさま、ぜひ一度本事業のHPをチェックしてみてください。お手元に使わないノートパソコンがありましたら、学生への教育研究支援のため、ご提供のほどよろしくお願いします! 家では、基本のんびりです。週末になると習い事に行く私を玄関で見送る夫と愛犬...。老後を楽しくするべく精進(?)しています。マイペースに日常を送る私の面倒を見ている夫と愛犬に感謝の毎日です。



デスクにて



頼もしい
上司と
同僚です

得意ワザ：いざというときの思い切り!
自分の性格：基本「てきとう」、ときどき「こだわり」。
次回執筆者のご指名：有森健晴さま
次回執筆者との関係：採用時の直属の上司。
自称「愛犬家」の先輩でもあります。
次回執筆者の紹介：ぼーっとした新人をお菓子で釣りに、ここまで育てていただきました...か?
次は「うさぎや」のどら焼きを希望します!

コミュニケーションセンターだより No.60

■オープンキャンパス

8/6: @本郷キャンパス 8/7: @駒場キャンパス

今年もオープンキャンパスは大盛況でした。多くの高校生で本郷も駒場も賑わい、UTCC学生スタッフも先輩としてとても楽しそうに仕事をしていました。

特に駒場キャンパスでは、今年もテント出店をさせて頂いたのですが、ただ商品紹介をするだけでなく、高校生との会話をメインに営業しました。「どこから来たんですか?」と質問してみると、北は北海道から南は九州まで遠路はるばる来てくれた高校生が本当に多く、中にはUTCCスタッフと出身高校が同じで現在高校二年生という学生が、「先輩がここで働いているのを見て僕も励みになりました!!東大合格目指して頑張ります!!」と言って笑顔くれたこととても印象深く覚えています。



受験勉強を頑張っている高校生達がUTCCに立ち寄り、現役東大生と話をすることで、受験勉強の励みになってくれたら、とスタッフ一同思っていましたので、今回のオープンキャンパスは最高の日となりました。

■UTCCスタッフおすすめ商品のご紹介!!



文学部言語文化学科
言語学専修課程 4年
竹内 碧

はじめまして。UTCCスタッフの竹内です。UTCCでは東大の研究成果商品やオリジナルグッズを多数取り揃えております。

そんなUTCCから、今回はこれまでとは少し趣向を変えて「博物館図録」を紹介します。当店では東京大学総合研究博物館の展示会図録を販売しており、特に「北の異界」は私の一押しです。オホーツク先史時代の研究がまとめられており、是非読んで頂きたい一冊です。

その他にも今までに博物館で行われた多種多様な展示を是非お手元に残してみませんか。現在展示が行われている「鉄137億年の宇宙誌」図録もご用意しております。

皆様のご来店をスタッフ一同心よりお待ちしております。

(担当: コミュニケーションセンター 山下)



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN: 月曜~土曜 10:30~18:30
電話: 03-5841-1039
<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>



ケータイからみた東大 ~東大ナビ通信~

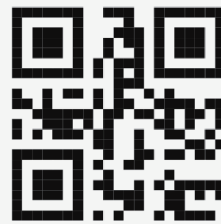


東大ナビとは?

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください!



東大ナビ
はじまる

ケータイでお得なイベント情報をGET!

詳しくは utnav.jp にアクセス。
または mail@utnav.jp に空メール!

東京大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信!

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力!

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了!

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- <http://utnav.jp>にアクセス
 - イベント掲載フォームから送信!
 - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで!
- 内線; 27823
 - メール; info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
 - オフィス; 本郷キャンパス 第二本部棟403号室

INFORMATION

募集

募集

大学院人文社会系研究科・文学部

平成 22 (2010) 年度大学院人文社会系研究科 入学試験日程を発表

9月1日(火)から「平成22(2010)年度大学院人文社会系研究科修士課程及び博士課程学生募集要項」の配付を開始しました。日程は以下のとおりです。

【修士課程】

筆記試験(第一次試験) 平成22年1月23日(土)

口述試験(第二次試験) 平成22年2月9日(火)

※現代文芸論専門分野、文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻の口述試験(第二次試験)については、**2月8日(月)**に行います。

※文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れ(日本人のみ)も行っています。

【博士課程】

第一次選考 論文審査等

(専門分野によっては学力試験を実施)

第二次選考(口述) 平成22年2月12日(金)

※現代文芸論専門分野、文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻の第二次選考(口述)については、**2月10日(水)**に行います。

※文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れ(日本人のみ)も行っています。

また、出願期間は以下のとおりです。

【修士課程】

平成21年10月19日(月)～10月23日(金)

(郵送のみ受付。23日(金)17:00必着)

【博士課程】

平成21年12月3日(木)～12月9日(水)

(直接持参又は郵送。9日(水)15:00必着)

募集要項の郵送を希望する場合は、封筒の表に「〇〇課程学生募集要項請求」と朱書きし、郵便番号・住所・氏名を明記して、200円分(修・博等2部必要な場合は240円分)の切手を貼付した返信用封筒(角型2号)を同封し、以下へ送付してください。

〒113-0033

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学大学院人文社会系研究科 事務部

電話 03-5841-3710,3712 (大学院係)

お知らせ

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

実際にパソコンを使いながら、わかりやすく説明します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●日程・コース概要：

■10/7(水)12:10～12:30 自宅から検索するには？
(20分のワンポイント講習会)

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCSアカウント認証によるSSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■10/9(金)16:00～17:00 日本の論文を探すには？
日本国内の雑誌論文の代表的なデータベース「CiNii」(サイニイ)の使い方を中心に解説します。

■10/13(火)16:00～17:00

■10/29(木)16:00～17:00

文献リストをサクッと作成～RefWorksを使うには～

Web上で使える文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの

取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。(同じ内容で2回開催)

■ 10/21 (水) 16:00 ~ 17:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種文献の探し方を、まとめてコンパクトに実習します。

■ 10/23 (金) 16:00 ~ 17:00 電子ジャーナルを利用するには？

ScienceDirectなどの電子ジャーナルサイトを例にとって、利用方法を解説します。また、「UT Article Link」(東京大学学術論文リンク)を使って、データベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

■ 10/28 (水) 16:00 ~ 17:30

Webで文献の「検索」から「整理」まで ～ Web of Science + EndNote Web コース～

Web of Scienceは、全分野の主要学術雑誌に掲載された論文のデータベースです。通常のキーワード検索に加え、引用文献を手がかりとした検索も可能です。

後半は、Web上で使える文献管理ツール「EndNote Web」の基本的な使い方を実習します。

●会 場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●参加費：無料

●予約不要

各回先着12名。直接ご来場ください。

●知りたいことがピンポイントでわかる！

オーダーメイドの出張講習会も受付中。

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。卒論指導や進学予定者のガイダンスなど、授業の1コマや、ゼミなどにご活用ください。ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡ください。(無料)

出張講習会については、下記サイトをご参照ください。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

●講習会やデータベース情報などを見逃さないために。

Litetopi メールマガジン発信中。

当係発行のLitetopi(リテトピ)メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記までメールでご連絡ください。(無料)

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

月	火	水	木	金
10/5	10/6	10/7 12:10 - 12:30 自宅から	10/8	10/9 16:00 - 17:00 日本の論文
10/12	10/13 16:00 - 17:00 RefWorks	10/14	10/15	10/16
10/19	10/20	10/21 16:00 - 17:00 早わかり	10/22	10/23 16:00 - 17:00 電子ジャーナル
10/26	10/27	10/28 16:00 - 17:30 EndNoteWeb	10/29 16:00 - 17:00 RefWorks	10/30

お知らせ

本部入試グループ

各種選抜要項・募集要項等の配布のお知らせ

「平成21年度入学者選抜要項」及び「大学案内2009」の配付始まる

「平成21年度東京大学入学者選抜要項」が決定し、各都道府県教育委員会等に通知するとともに7月25日(土)から、本郷キャンパス〔正門、赤門、広報センター(龍岡門)、コミュニケーションセンター(赤門脇)、東大生協(安田講堂売店、書籍部)、農学部正門〕、駒場Iキャンパス(正門、コミュニケーションプラザ北館1階生協購売部)で配付を開始した。また、「大学案内」についても、2009年度版の配付を同様に開始した。なお、本学ホームページ、テレメールからも請求することができる。平成21年度入学者選抜の実施教科・科目等は表1・2・3のとおりである。

「平成21年度外国学校卒業学生募集要項」の配付始まる

「平成21年度東京大学外国学校卒業学生募集要項」が決定し、7月1日(水)から入学志願者に対し、本郷キャンパス〔正門、赤門、広報センター(龍岡門)〕、駒場Iキャンパス(正門)で配付を開始した。また、本学ホームページ、テレメールからも請求することができる。なお、平成21年度の募集人員、出願資格、選抜方法等、出願期間、選抜期日など、特別選考の概要は表4のとおりである。

表1 平成22年度 東京大学入学者選抜前期日程試験等の実施教科・科目等について（文科各類）

学部・学科等名 及び募集人員等 (平成21年度 志願倍率)	学力検査等の 区分・日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名			個別学力検査等(第2次学力試験)			大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等						特別の選 抜方法等	その他
		教科	科目名	等	教科等	科目名	等	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科		
文科一類 4.1 401人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 現代文 数Ⅰ・数Ⅱ 物理Ⅰ 化学Ⅰ 英、独、仏、中、韓から1	日A, 日B, 地理A, 地理Bから1 政経から1 工、簿・会、情報から1 地学Ⅰから1	[6教科7科目]	国語総合・国語表現Ⅰ・現代文・古典 教Ⅰ・教Ⅱ・教A・教B 日B, 世B, 地理Bから2 英(英Ⅰ・英Ⅱ・リーディング), 独, 仏, 中から1	約3.0倍	センター試験	200	100	100	200	100	200	900	外国人 追加合格
文科二類 3.4 353人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 現代文 数Ⅰ・数Ⅱ 物理Ⅰ 化学Ⅰ 英、独、仏、中、韓から1	日A, 日B, 地理A, 地理Bから1 政経から1 工、簿・会、情報から1 地学Ⅰから1	[6教科7科目]	国語総合・国語表現Ⅰ・現代文・古典 教Ⅰ・教Ⅱ・教A・教B 日B, 世B, 地理Bから2 英(英Ⅰ・英Ⅱ・リーディング), 独, 仏, 中から1	約3.0倍	センター試験	200	100	100	200	100	200	900	外国人 追加合格
文科三類 3.2 469人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 現代文 数Ⅰ・数Ⅱ 物理Ⅰ 化学Ⅰ 英、独、仏、中、韓から1	日A, 日B, 地理A, 地理Bから1 政経から1 工、簿・会、情報から1 地学Ⅰから1	[6教科7科目]	国語総合・国語表現Ⅰ・現代文・古典 教Ⅰ・教Ⅱ・教A・教B 日B, 世B, 地理Bから2 英(英Ⅰ・英Ⅱ・リーディング), 独, 仏, 中から1	約3.0倍	センター試験	200	100	100	200	100	200	900	外国人 追加合格

注1【大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

- ① 数学において、「工業数理基礎」, 「簿記・会計」, 「情報関係基礎」を選択できる者は, 高等学校又は中等教育学校においてこれらの科目を履修した者及び専修学校の高等課程の修了(見込み)者だけである。
- ② 理科において, 複数の科目を受験した場合は, 高得点の科目の成績を合否判定に利用する。
- ③ 外国語において, 「英語」のリスニングテストの成績は, 利用しない。

注2【個別学力検査等】欄

- ① 数学Bの出題範囲は次のとおりである。
数学B(1)教科目, 「ベクトル」
- ② 英語試験の一部に聞き取り試験を行う。(30分程度)

注3【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】欄

大学入試センター試験の成績の判定は, 大学入試センター試験の成績(総得点900点を110点に換算)と個別学力検査の成績(総得点440点)とを総合(550点満点)して行う。この比率は, 大学入試センター試験の成績を「1」, 個別学力検査の成績を「4」とする。

表2 平成22年度 東京大学入学者選抜前日程試験等の実施教科・科目等について (理科各類)

学部・学科等名 及び募集人員等 (平成21年度 志願倍率)	学力検 査等の 区分・ 日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名 注1			個別学力検査等 (第2次学力試験)			大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等					特別の選 抜方法等	その他	
		教科	科目名	等	教科 等	科目名	等	試験の区分	国語	地歴	公民	数学			理科
理科一類 2.6 1,108人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 世A, B 地理 現社, 倫 数I・数B, 生I, 地学Iから2 英, 独, 仏 ※地歴, 公民を合わせて1教科として扱う。 [5教科7科目]	世B, 日A, 日B, 地理A, } から1	国 教 理 外	国語総合・国語表現I 数I・数II・数III・数A・数B・数C 物I・物II, 化I・化II, 生I・生II, 地学I・地学IIから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約2.5倍	センター試験	200	*100	*100	200	200	200	900	帰国子女 外国人 追加合格
理科二類 3.9 532人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 世A, B 地理 現社, 倫 数I・数B, 生I, 地学Iから2 英, 独, 仏 ※地歴, 公民を合わせて1教科として扱う。 [5教科7科目]	世B, 日A, 日B, 地理A, } から1	国 教 理 外	国語総合・国語表現I 数I・数II・数III・数A・数B・数C 物I・物II, 化I・化II, 生I・生II, 地学I・地学IIから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約3.5倍	センター試験	200	*100	*100	200	200	200	900	帰国子女 外国人 追加合格
理科三類 5.5 98人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 世A, B 地理 現社, 倫 数I・数B, 生I, 地学Iから2 英, 独, 仏 ※地歴, 公民を合わせて1教科として扱う。 [5教科7科目]	世B, 日A, 日B, 地理A, } から1	国 教 理 外	国語総合・国語表現I 数I・数II・数III・数A・数B・数C 物I・物II, 化I・化II, 生I・生II, 地学I・地学IIから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約4.0倍	センター試験	200	*100	*100	200	200	200	900	帰国子女 外国人 追加合格

注1【大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

- (1) 地理歴史及び公民において、複数の科目を受験した場合は、高得点の科目の成績を合否判定に利用する。
- (2) 数学において、「工業数理基礎」、『簿記・会計』、『情報関係基礎』を選択できる者は、高等学校又は中等教育学校においてこれらの科目を履修した者及び専修学校の高等課程の修了(見込み)者だけである。
- (3) 理科において、3科目を受験した場合は、高得点の2科目の成績を合否判定に利用する。
- (4) 外国語において、『英語』のリスニングテストの成績は、利用しない。

注2【個別学力検査等】欄

- (1) 英語試験の一部外に聞き取り試験を行う。(30分程度)
- (2) 数学B, 数学Cの出題範囲は次のとおりである。
数学B(「数列」, 「ベクトル」), 数学C(「行列とその応用」, 「式と曲線」)
- (3) 理科の出題範囲は次のとおりである。
物理I, 物理II(「力と運動」, 「電気と磁気」, 選択範囲からは「物質と原子」のうち、原子・分子の運動(熱力学を含む)を指定)
化学I及び化学IIの「物質の構造と化学平衡」で学ぶことを基礎とする問題を出題する。題材として、化学IIの「生活と物質」, 「生命と物質」の内容を用いることはあり得る。
「化学I・化学II」
「生物I・生物II」
生物I, 生物IIから出題する。生物IIの「生物の分類と進化」, 「生物の集団」の中から出題する場合は、いずれかを履修していない生徒がいることを考慮し、背景を説明した上で総合問題として出題する, 選択問題にする, などの配慮を行う。

注3【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】欄

- (1) 学力試験の成績の判定は、大学入試センター試験の成績(総得点900点を110点に換算)と個別学力検査の成績(総得点440点)とを総合(550点満点)して行う。この比率は、大学入試センター試験の成績を「1」、個別学力検査の成績を「4」とする。
- (2) 配点に*印を付している教科は、選択教科であることを表す。

表3 平成22年度 東京大学入学者選抜後期日程試験の実施教科・科目等について〔全科類（理科三類を除く）〕

学部・学科等名 及び募集人員等 (平成21年度 志願倍率)	学力検 査等の 区分・ 日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名		注1 科目名 等	個別学力検査等 (第2次学力試験)		大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等						注3 点 配 計	特別の選 抜方法等 その他		
		教科	科目		試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	総合科目I			総合科目II	総合科目III
全科類 (理科三類を除く) 31.66 100人	3月13日	国語 世A, 世B, 日A, 日B, 地理A, 地理B 現社, 倫, 政経 数I・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから1 英, 独, 仏, 中, 韓から1 ※地歴, 公民を合わせて1教科として扱う。 [5教科6科目]	世A, 世B, 日A, 日B, 地理A, 地理B 現社, 倫, 政経 数I・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから1 英, 独, 仏, 中, 韓から1 ※地歴, 公民を合わせて1教科として扱う。 [5教科6科目]	国語 世A, 世B, 日A, 日B, 地理A, 地理B 現社, 倫, 政経 数I・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから1 英, 独, 仏, 中, 韓から1 ※地歴, 公民を合わせて1教科として扱う。 [5教科6科目]	2段階 選抜 約5.0倍	総合科目I 総合科目II 総合科目III	センター試験	200	*100	*100	200	100	100	100	800	追加合格
							個別学力検査					100	100	100	300	

注1【大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

- (1) 地理歴史及び公民において、複数の科目を受験した場合、高得点の科目の成績を合否判定に利用する。
- (2) 数学において、「工業教理基礎」、『簿記・会計』、『情報関係基礎』を選択できる者は、高等学校又は中等教育学校においてこれらの科目を履修した者及び専修学校の高等課程の修了（見込み）者だけである。
- (3) 理科において、複数の科目を受験した場合、高得点の科目の成績を合否判定に利用する。
- (4) 外国語において、『英語』はリスニングアスタの成績を含む（筆記200点、リスニング60点の合計260点を200点に換算する）。

注2【個別学力検査等】欄

- (1) 総合科目Iは、英語の読解力と記述力を見る（英語読解・記述を通して、表現力、構成力などを審査する）。
- (2) 総合科目IIは、事象の解析への数学の応用力を見る（自然や社会のさまざまな事象を数学的に解析することを行う。ここで用いられる数学の知識は高等学校又は中等教育学校における数学I・数学II・数学III・数学A・数学B（数列、ベクトル）・数学C（行列とその応用、文化、社会、科学等に関する問題について論述させ、理解力・思考力・表現力を見る）。
- (3) 総合科目IIIは、文化、社会、科学等に関する問題について行う。ただし、判定に必要な場合は、大学入試センター試験の成績や調査書を考慮することがある。

注3【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】欄

- (1) 合格者の判定は、個別学力検査の結果に基づいて行う。ただし、判定に必要な場合は、大学入試センター試験の成績や調査書を考慮することがある。
- (2) 配点に*印を付してある教科は、選択教科であることを表す。

表4 平成 22(2010) 年度 外国学校卒業学生特別選考

東京大学

実施科類	文科一類, 文科二類, 文科三類 理科一類, 理科二類, 理科三類
募集人員	文科一類, 文科二類, 文科三類 理科一類, 理科二類, 理科三類 } 第1種, 第2種 各若干名
出願資格	<p>[第1種] (外国人であって日本国の永住許可を得ていない者) 平成17(2005)年4月1日から平成22(2010)年3月31日までの間に、次の基礎資格を取得し、かつ、要件を満たしている者とする。</p> <p>(1) 基礎資格 次のア、イいずれかに該当すること。 ア 外国において、我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校を修了した者及び修了見込みの者、又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したもの 「外国において、我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校」とは、地理的、場所的に外国で、原則として、その国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであって、修了により大学への受験資格を得られることを要する。インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については、本規定によって出願が認められないケースや出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので、早めに照会すること。 イ 下記のいずれかの資格を外国において取得し、かつ、18歳に達したもの ○ スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格 ○ ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格 ○ フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格</p> <p>(2) 要件 次に掲げるすべての要件を満たすこと。 ア 独立行政法人日本学生支援機構が実施する日本留学試験（平成21(2009)年6月、11月実施のいずれか）の所定の科目をすべて受験すること（日本語・英語いずれの出題言語でも受験可）。所定の科目とは、文科各類を志望する者は文科系の科目である「日本語」・「総合科目」・「数学（コース1）」、理科各類を志望する者は理科系の科目である「日本語」・「理科（物理・化学・生物から2科目選択）」・「数学（コース2）」のことである。 （注）数学のコース選択を注意すること。コースの選択を間違えた者は、第1次選考不合格者とするので注意すること。 イ TOEFL (Test of English as a Foreign Language) を受験すること（iBT, PBT, CBTいずれでも可）。なお、出願期間までにOfficial Score Report 又はExaminee Score Recordが提出できれば、受験時期は問わない。 ウ 外国の学校に、原則として、最終学年を含め継続して1年以上在学し、その最終学校を修了すること。</p> <p>[第2種] (日本人及び第1種以外の外国人) 平成20(2008)年4月1日から平成22(2010)年3月31日までの間に、次の基礎資格を取得し、かつ、要件を満たしている者とする。</p> <p>(1) 基礎資格 次のア、イいずれかに該当すること。 ア 外国において、我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校を修了した者及び修了見込みの者、又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したもの 「外国において、我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校」とは、地理的、場所的に外国で、原則として、その国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであって、修了により大学への受験資格を得られることを要する。インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については、本規定によって出願が認められないケースや出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので、早めに照会すること。 なお、文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設出身者は出願が認められない。 イ 下記のいずれかの資格を外国において取得し、かつ、18歳に達したもの ○ スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格 ○ ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格 ○ フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格</p> <p>(2) 要件 次のア、イいずれかの要件を満たすこと。 ア 外国の学校に最終学年を含め継続して3年以上在学し、その最終学校を修了すること。ただし、最終学年の休業等によって書類上の在学期間が3年未満となる場合については、12月下旬に行う出願資格審査において、3年以上在学した者との実質的な同等性について判断する。</p>

出願資格	イ 外国の学校に最終学年を含め最終学年からさかのぼって連続する6年間のうち通算で5年以上在学し、その最終学校を修了すること。 ただし、休業等によって書類上の在学期間が5年未満となる場合については、12月下旬に行う出願資格審査において、5年以上在学した者との実質的な同等性について判断する。
選抜方法等	<p>[第1種] (外国人であって日本国の永住許可を得ていない者)</p> <p>(1) 第1次選考 書類選考, 日本留学試験及びTOEFL (Test of English as a Foreign Language) の成績</p> <p>(2) 第2次選考 小論文, 面接 なお、小論文については次のとおりである。 [小論文] 2問を課す。 2問とも日本語で解答すること。</p> <p>[第2種] (日本人及び第1種以外の外国人)</p> <p>(1) 第1次選考 書類選考</p> <p>(2) 第2次選考 小論文, 学力試験, 面接 なお、小論文及び学力試験の出題教科・科目については次のとおりである。 [小論文] 2問を課す。 第1問は日本語で解答し、第2問は次の言語のうちからあらかじめ出願の際に届け出たもので解答すること。英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、韓国朝鮮語、アラビア語</p> <p>[学力試験]</p> <p>(文科各類) 外国語 英語 (英 I, 英 II, リーディング), ドイツ語, フランス語, 中国語から1外国語 ただし、問題の一部分は、届け出た外国語に代えて、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、韓国朝鮮語のうちから一つを試験場において選択することができる。 (注) 英語試験の一部分に聞き取り試験を行う。(30分程度)</p> <p>(理科各類) 数学 数 I, 数 II, 数 III, 数 A, 数 B (数列, ベクトル), 数 C (行列とその応用, 式と曲線)</p> <p>理科 物 I・物 II, 化 I・化 II, 生 I・生 II, 地学 I・地学 II から2科目</p>
出願期間	第1種 平成21(2009)年12月1日(火)から12月8日(火)まで 第2種 平成21(2009)年11月2日(月)から11月10日(火)まで
選抜期日	第1種 平成22(2010)年2月25日(木), 3月17日(水) 第2種 平成22(2010)年2月25日(木)・26日(金), 3月17日(水)
合格発表日	平成22(2010)年3月23日(火)
その他	「平成22(2010)年度外国学校卒業学生募集要項」は、以下の方法で交付中である。 (1) Webサイトからダウンロード 「特別選考の概要」 http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_02_04_j.html (2) 「入学者募集要項等の請求方法」(裏表紙)(1)～(3)の請求方法 (3) 大学に直接訪問して受領 交付場所 本郷キャンパス正門・赤門・広報センター(龍岡門), 駒場Iキャンパス正門

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

演習林の広報誌「科学の森ニュース No.47」の発行

「科学の森ニュース」は3ヶ月に1回発行している演習林の広報誌で、9月10日(木)にNo.47を発行しました。演習林の最近の話題を始め、動植物や研究を紹介するシリーズも載っています。広報センター、農学部正門、農学系事務部、弥生講堂等で配布している他、演習林のホームページからもご覧になれます。

～ 科学の森ニュース No.47 目次 ～

【トピックス】

台湾大学実験林創設 60 周年記念式典

演習林国際交流委員会

第 15 回市民公開セミナー「樹海めぐり」

北海道演習林

子ども達に自然を伝えよう！

(全学体験ゼミナール「都市の緑のインタープリター養成－子どもに伝える自然体験－)

田無試験地

山中寮内藤セミナーハウス竣工記念式典

富士演習林

【クローズアップ】

大きな(切り)株－光と根の関係を調べる－

秩父演習林

【演習林のイベントダイジェスト】

【科学の森の動植物紹介】

ミカワショウマ

愛知演習林

【コラム】

房総半島のヒメコマツの保全活動

千葉演習林 池田裕行

演習林のホームページ

<http://www.ufa.u-tokyo.ac.jp/>



お知らせ

環境安全本部、本部労務・勤務環境グループ

2009 年度 東京大学メンタルヘルスセミナー
ストレスに強い「私」を作る2つのワークショップ
～参加者募集中～

法人化以降、毎年実施してきたメンタルヘルス研修会を2009年度より拡充します。

本セミナーはストレスへの耐性を高め、コミュニケーション能力の強化を希望する教職員の皆様に実践的なトレーニングを提供するもので、環境安全本部、産業医と本部労務・勤務環境グループが共催する形態で、本年度は以下の2講座計11回を本郷、駒場、柏の3キャンパスで開催します。

ストレスと上手につきあうことは、働く世代の至上命題。本セミナーは教職員の皆さんのストレス耐性を高め、他者とのコミュニケーションで無用なストレスを感じない、生まないコツを体得していただくことを趣旨としています。先着順ですので、お早めに申し込みください。

ワークショップ1 「私」のストレスへの気付き・対処

「私」のストレスへの気付き、対処の方法を考えるセミナーです。「私」のため、大切な人のため、ストレスに上手につき合うツボを学びます。

【本郷地区】

	日 時	会 場
①	9月18日(金)	14:00～ 17:00 薬学系総合研究棟 10階 大会議室
②	10月23日(金)	
③	11月13日(金)	

【駒場地区】

	日 時	会 場
④	10月29日(木)	14:00～ 17:00 アドミニストレーション棟3階大会議室
⑤	11月24日(火)	

【柏地区】

	日 時	会 場
⑥	10月1日(木)	13:30～ 16:30 物性研究所6階セミナー室615

ワークショップ2 アサーショントレーニング 初級

上手な自己表現は職場・家庭の双方で無用な摩擦やストレスを回避し、円滑な人間関係を築く基本です。このコースでは、自らのコミュニケーションパターンを振り返り、「私」も相手も大切にした「アサーティブな」コミュニケーションの考え方を体験します。

【本郷地区】

	日 時	会 場
⑦	11月27日(金)	14:00～ 17:00 薬学系総合研究棟 10階大会議室
⑧	12月4日(金)	
⑨	1月22日(金)	

【駒場地区】

	日 時	会 場
⑩	12月9日(水) 14:00～ 17:00	アドミニストレーシ ョン棟3階大会議室

【柏地区】

	日 時	会 場
⑪	11月16日(月) 13:30～ 16:30	物性研究所6階セミ ナー室 615

【お問い合わせ先】

本部労務・勤務環境グループ（内）22062、22174
産業衛生室（内）28429

【お申し込み先】

各部局研修担当者



2009年度 東京大学メンタルヘルスセミナー

「私」を作る 2つのワークショップ

ワークショップ1 基礎編

▶ **「私」のストレスへの気づき・対処**

「私のストレスへの気づき、対処の方法を考えるセミナーです。自分自身、大切な人化境、ちょっと立ち止まってみてみるから、ストレスに上手に付き合えるようになります。」

▶ **本セミナー** 物性研究所 6階セミナー室 615号室
2009年 10月23日(金) 14:00～17:00
2009年 11月13日(金) 14:00～17:00

▶ **駒場キャンパス** アドミニストレーション棟3階大会議室
2009年 10月29日(木) 14:00～17:00
2009年 11月24日(水) 14:00～17:00

▶ **結核キャンパス** 物性研究所 6階セミナー室 615号室
2009年 10月1日(木) 13:30～16:30

ワークショップ2 応用編

▶ **アサーショントレーニング 初級**

あなたは自己表現に自信がありますか？
上手な自己表現は職場・家庭の両方で素晴らしい効果やストレスを軽減し、円滑な人間関係を築く基本です。
このコースでは、自分のコミュニケーションパターンを振り返り、「私」を相手に伝える「アサーティブ」なコミュニケーションの考え方を体験します。

▶ **本セミナー** 物性研究所 6階セミナー室 615号室
2009年 11月27日(金) 14:00～17:00
2009年 12月4日(金) 14:00～17:00
2010年 1月22日(金) 14:00～17:00

▶ **駒場キャンパス** アドミニストレーション棟3階大会議室
2009年 12月9日(水) 14:00～17:00
2009年 12月29日(水) 14:00～17:00

▶ **結核キャンパス** 物性研究所 6階セミナー室 615号室
2009年 11月16日(月) 13:30～16:30

主催者 東京大学 教職員

会場 物性研究所 6階セミナー室 615号室

お問い合わせ先 本部 労務・勤務環境グループ (内)22062、22174 産業衛生室 (内)28429

お知らせ

生産技術研究所

第5回東京大学駒場キャンパス技術発表会開催のお知らせ

生産技術研究所ならびに大学院総合文化研究科・教養学部共催の技術発表会を、下記の通り開催します。

特別講演に産業技術総合研究所・計量標準総合センター主任研究員・山田善郎氏をお招きして「知られざる計量—高温定点—」の研究とその過程における苦労をまじえた講演をお願いしていますので、ふるってご来聴ください。

また、発表会終了後に懇親会を開催しますので併せてご参加ください。

記

日 時：10月21日（水）9：30～17：00

場 所：駒場リサーチキャンパス

総合研究実験棟・コンベンションホール

【口頭発表】

「ソフトマターの構造形成における流体力学的効果の役割 —高分子鎖の凝縮転移を例として—」

鎌田久美子 技術職員

生産技術研究所・第1部

「超高真空実験用コールドヘッドの設計及び製作」

河内 泰三 技術専門職員

生産技術研究所・第1部

「東大生研海洋工学水槽の改良措置について（その2）

—利用者の操作性・安全性の向上を中心に—」

板倉 博 技術専門職員

生産技術研究所・第2部

「地盤材料の要素試験に適用した画像解析システムの精度検証」

堤 千花 技術職員

生産技術研究所・第5部

「アーク溶接等特別教育インストラクターコースの受講報告」

板倉 善宏 技術専門職員

生産技術研究所・試作工場

【ポスター発表】

「SQL インジェクション攻撃に耐性のある Web アプリケーションサーバーの構築」

細井 琢朗 技術専門職員

生産技術研究所・第3部

「くうかん実験棟の紹介 —間伐材を利用した木造ブロック積層工法建物の観測報告—」

大塚日出夫 技術専門職員

生産技術研究所・第5部

「小型粉末焼結造形装置の設計、開発について」

西山 祐司 技術専門職員

生産技術研究所・試作工場

【特別講演】

「古典的技術分野におけるフロンティア ―高温標準の研究―」

山田 善郎 主任研究員

産業技術総合研究所・計量標準総合センター

【懇親会】

発表会では収まらなかった討論などを、懇親会で発表者と引き続き行ってください。

今回は催し物としてフルート・琴の演奏を企画しています。

ご来聴いただければ幸いです。皆様のご参加をお待ちしています。

日時：10月21日（水）17:30～20:00

会場：駒場リサーチキャンパス

総合研究実験棟

コンベンションホール前ホワイエ

会費：1,500円

【問い合わせ先】

第5回東京大学駒場キャンパス技術発表会実行委員長

大塚 日出夫（内線 56842）

E-mail hideo@iis.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

附属図書館

総合図書館備付け図書の推薦について（平成21年度冬学期）

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、また教養をより豊かにするために、全学の教員（常勤講師以上）から図書を推薦していただく制度を設けています。

つきましては、下記のとおり図書の推薦をお願いします。

1 取りまとめ窓口 各部局図書館（室）

2 推薦期限 10月30日（金）

なお、その他の図書の推薦は随時受け付けます。

3 推薦図書の範囲

（1）講義に密着した図書は、本郷キャンパスの講義を対象としています。

（2）その他、学生の教養書としてふさわしいものを推薦ください。ただし、雑誌および学生にとってあまりに高度な専門図書、医学・薬学臨床系図書は除いてください。

4 推薦方法 総合図書館備付け図書推薦要領によります。

※推薦要領は、各部局図書館（室）に備付けています。

*附属図書館 Web サイト

(<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>)

上記サイトの「ニュース」にある「総合図書館備付け図書の推薦受付について」もご参照ください。

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第65回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第65回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、千葉大学大学院理学研究科の高山浩司博士による、汎熱帯海流散布植物の系統地理に関する講演です。汎熱帯海流散布植物は、海流を利用して種子を散布し、熱帯域を中心に世界中に分布域を拡げた植物です。この興味深い植物群について、どんなことがわかってきているのか、最新の研究成果に触れられる絶好の機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お問い合わせ

せの上、是非ご参加下さいませよう、ご案内申し上げます。

講師：高山 浩司（千葉大学大学院理学研究科）
演題：「海を渡る植物—汎熱帯海流散布植物の系統地理—」
日時：10月31日（土）14：00～16：00
場所：理学系研究科附属植物園本園（小石川植物園）柴田記念館

参加費：無料（但し、一般の方は入園料が必要です）
参加申込方法：10月20日（火）までに、往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先：〒112-0001 文京区白山3-7-1
東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
小石川植物園後援会
koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp

問い合わせ先：理学系研究科附属植物園
杉山宗隆准教授（03-3814-0368）

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第16回理学部公開講演会

「ガリレオ・ダーウィン・ラボアジエから現代の理学へ」

今年はガリレオが望遠鏡を使ってから400年、ラボアジエが化学原論を出版してから220年、そしてダーウィンが生まれてから200年になります。彼らの成果を基礎として発展した近代科学は、今では、当時は想像するしかなかったものも研究対象にしています。現代の望遠鏡や顕微鏡などによって明らかになった理学の最前線を紹介します。

日時：11月8日（日）14：00～16：30（13：00開場）
* 終了後、講演者との歓談の時間を設けます。

会場：本郷キャンパス 安田講堂

入場：無料 事前申し込み不要

どなたでもご参加いただけます。

定員：700名（当日先着順）

講演内容：

「南米アタカマ砂漠から探る見えない銀河の誕生」
河野 孝太郎（理学系研究科 附属天文学教育研究センター 教授）

「朝の光と朝ごはん：体内時計の時刻リセット」
深田 吉孝（理学系研究科 生物化学専攻 教授）

「百聞は一見に如かず—顕微鏡で見る有機化学—」
中村 栄一（理学系研究科 化学専攻 教授）

中継：インターネット配信を予定

主催・問い合わせ先：大学院理学系研究科・理学部
TEL: 03-5841-7585

E-mail: kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp

URL: <http://www.s.u-tokyo.ac.jp/PL16>

読者投稿写真 No.2



はじめて折った『笠地蔵』
— あ～、できた～っ！ —

（撮影：広報センター 細谷恵子さん）

鈴木弘名誉教授

本学名誉教授鈴木弘先生は、8月14日午後9時16分、肺炎のためご逝去されました。享年94歳でした。



鈴木弘先生は大正4年6月1日愛媛県にお生まれになり、昭和15年3月東京帝国大学工学部機械工学科を卒業し、同年4月住友金属工業株式会社に入社、同年9月海軍造機中尉に任官した後、昭和17年11月東京帝国大学助教授に任ぜられ、第二工学部に日本ではじめて設けられた非切削工作学講座を担任されました。昭和25年4月東京大学第二工学部の改組とともに東京大学生産技術研究所勤務となり、非切削工作学部門、ついで変形加工学部門を担当されました。昭和27年11月東京大学教授に昇任、昭和51年4月東京大学を停年退官し、名誉教授の称号を授与されました。この間、昭和46年11月より49年11月まで東京大学生産技術研究所長および東京大学評議員、さらに全国研究所長会議会長ならびに国立大学協会専門委員等をつとめられました。

鈴木弘先生は一貫して、鉄鋼・非鉄金属等工業用材料の生産・加工の分野で主たる位置を占める塑性加工学及び塑性加工機械工学の研究に取り組み、数多くの業績を上げられました。圧延工学、および変形抵抗に関連する一連の理論的・実験的研究は特筆すべきもので、わが国の工業技術・学問の発展や技術体系の確立に大きく貢献し、我が国鉄鋼業の戦後の飛躍的発展を支える役割を果たしました。先生の研究の幅は広いのですが、例えば昭和40年頃電子計算機による大規模数値計算を駆使し、行われた連続圧延機の動特性の解明に関する研究は、金属薄板製造の生産性を高め安定した製造を実現することに繋がりました。また国産第1号の高速圧縮実験機を製作し、その後約10年の間に、実用金属の大半を占める鉄系金属材料49種類、非鉄系金属材料21種類の塑性変形抵抗を、1200℃、100/secまでの変形速度の範囲で詳細に測定した結果をもとに編纂されたデータ集は、今でも国内のみならず世界的に引用、利用されています。これらの功績に対して、大河内記念技術賞・

精機学会明石記念賞・日本塑性加工学会論文賞・日本機械学会技術賞・日本鉄鋼協会浅田賞・紫綬褒章・日本学士院賞、など十余の賞が贈られております。

塑性加工学には、金属材料・塑性加工機械・計測制御・潤滑・力学および数値解析法など数多くの分野にまたがる研究課題、技術開発課題が含まれます。元来分野横断型、つまり transdisciplinary な性格を持つ塑性加工学を専門に扱う学会の必要性を先生は痛感され、昭和36年に社団法人日本塑性加工学会が設立されるにあたり大きな役割を果たされました。さらに、日本機械学会では副会長・理事をつとめ、日本鉄鋼協会、日本潤滑学会などの運営にも積極的に関わられました。他方、一時期通商産業省機械試験所部長を併任され、また、工業生産技術審議会・学術審議会など、数多くの政府諸官庁の審議会委員を歴任し、卓越した学識を持って行政に参画するとともに学界、産業界の振興に寄与されました。これらの顕著な学術功績によって先生は、昭和60年11月に勲二等旭日重光章、昭和61年11月には文化功労者に顕彰され、平成8年12月には学士院会員に選任されております。

先生は東京大学在職中より数多くの民間企業研究員を受け入れつつ共同研究を行い、退官後はご自身で設立された鈴木研究室を拠点に教育研究活動を精力的に進められました。退官後十年以上にわたり鈴木研究室にて開いた圧延工学および圧延技術研修会は、基礎理論を踏まえた研究開発と、他の分野に先駆けて技術輸出の時代に入ったことで要求された独自技術開発の、二つの要請に応える人材の育成を意図して行われたと聞いております。厳格さと温かさを兼ね備えた先生の薫陶を受けた大学院生、社会人研修生は数百人に及びます。財団法人生産技術研究奨励会理事長時代には、当時六本木（麻布キャンパス）にありました生産技術研究所にも元気なお姿を見せておられた先生は、最近では心臓や目の病を抱えてはおられましたが、ごく最近まで生産技術研究所千葉実験所（旧本学第二工学部）近くにあるご自宅にて元気にお過ごしで、執筆活動にも励んでおられました。

日本の工業技術の発展に大きな足跡を残されました、本研究所が誇る私どもの先輩を失いましたことは、本研究所はもとより各界にとりまして大きな損失であります。ここに哀悼の意を表すとともに慎んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(生産技術研究所)

氏名		異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
21.8.5	KNIGHTON MARY ALICE	辞 職	教養学部附属教養教育開発機構准教授
21.8.15	岩森 光	辞 職（東京工業大学大学院理工学研究科教授）	大学院理学系研究科准教授
21.8.15	黄 弘	辞 職	生産技術研究所附属都市基盤安全工学国際研究センター准教授
21.8.31	鈴木 光也	辞 職	大学院医学系研究科准教授
21.8.31	田村 智彦	辞 職	大学院医学系研究科准教授
21.8.31	福嶋 敬宜	辞 職	大学院医学系研究科准教授
21.8.31	LAMARRE CHRISTINE	辞 職	大学院総合文化研究科教授
（採 用）			
21.8.4	GEISSER THOMAS HERMANN	大学院数理科学研究科教授	
21.8.16	三浦 聡之	医科学研究所附属先端医療研究センター准教授	東京大学医科学研究所附属感染症国際研究センター特任助教
21.9.1	飯笹 幸吉	大学院新領域創成科学研究科教授	産業技術総合研究所地質情報研究部門海底系地球科学研究グループ長
21.9.1	大湾 秀雄	社会科学研究所准教授	
（昇 任）			
21.8.16	長谷川 潔	大学院医学系研究科准教授	大学院医学系研究科講師
21.8.16	瀬地山 角	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.8.16	館林 和夫	医科学研究所准教授	医科学研究所助教
21.9.1	越塚 登	大学院情報学環教授	大学院情報学環准教授
21.9.1	田中 秀幸	大学院情報学環教授	大学院情報学環准教授
21.9.1	林 香里	大学院情報学環教授	大学院情報学環准教授
21.9.1	水越 伸	大学院情報学環教授	大学院情報学環准教授
21.9.1	WILDE MARKUS	生産技術研究所准教授	生産技術研究所助教
21.9.1	北條 博彦	生産技術研究所准教授	生産技術研究所講師

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

平成21年度
学内広報
発行
スケジュール



問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
 TEL: 03-3811-3393
 内線: 22031
 E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

号数	原稿〆切	発行日	配布
1391	10月 1日(木)	10月 23日(金)	10月 29日(木)
1392	10月 29日(木)	11月 20日(金)	11月 27日(金)
1393	学生生活実態調査号		
1394	11月 25日(水)	12月 17日(木)	12月 24日(木)
1395	1月 6日(水)	1月 25日(月)	1月 29日(金)
1396	1月 29日(金)	2月 19日(金)	2月 25日(木)
1397	2月 25日(木)	3月 19日(金)	3月 26日(金)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある
 「記事提出要領」をご参照ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
 【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】



「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

作成例

本部広報グループ

「キャンパスツアー」スタート!

本学学生がツアーガイドとなって、赤門や大講堂(安田講堂)、三四郎池、総合図書館など、本郷キャンパス内の名所旧跡を案内する「キャンパスツアー」が今年も始まった。キャンパスツアーは昨年度から実施されており、「ジュニアTA制度」に基づき応募した学生が、東京大学の歴史や学生生活のエピソードを交えながら、約2時間にわたり案内する。

今年度のスタートとなった5月14日(土)には、午前、午後合わせて43人が参加し、ツアーガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。



広報センター前で説明するガイドとそれを聞く参加者

ツアーには、高校生以上であれば誰でも無料で参加することができる。今後のツアーは、五月祭期間や年末年始、入試期間を除く授業期間の土曜日と日曜日(10:00~12:00、14:00~16:00)に行われる予定である。



正門から大講堂に続く銀杏並木

記事の冒頭に**部局名**を記載

簡潔で分かりやすい**タイトル**を記載

- ・過去の報告記事(ニュース)では「**である調**」を用いる
- ・今後のお知らせ(インフォメーション)では「**ですます調**」を用いる

日付には括弧書きで**曜日**をつける

- ・写真を掲載する場合は、25文字以内で**キャプション**(写真の説明文)をつける。写真は3枚程度まで
- ・原稿とは別に、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを別途送付する(プリントの写真は学内便で送付)

句読点は「、」「。」を用いる

時間は**24時間表記**とする

- ・記事は一行25文字の書式で作成する。
- ・文字数は800字を目安とするが、内容によって増減は可とする。
- ・人物名は**フルネーム**で表記すること。

提出上の注意

1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとして送付すること。
(学内広報担当者の個人アドレスではなく、必ず下記のアドレスに送付してください。)

2. 締切日

HPで発行スケジュールを確認すること。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
トップページ> 広報・情報公開> 学内広報

問い合わせ先・提出先

本部広報グループ広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393(内線 22031)

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から、必ず**受領メール**をお送りしています(概ね1週間以内)。返信メールが届かない場合は、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、その際はお問合せ願います。

8月21日(金)17時より、日本学術振興会学術システム研究センター副センター長(前岐阜大学長)の黒木登志夫名誉教授をお招きし、「行動シナリオ」策定に向けた第3回のヒアリングが本部棟12階大会議室で実施された。

黒木名誉教授は、国立大学法

いて、東大の実力とはいえ、競争的資金の一極集中により他大学の研究に大きな影響が出ていると指摘。米英と比較した場合に、トップ大学以外にはほとんど競争的資金が配分されていない事実を紹介し、「東大一人勝ち」は長期的には学術の衰退につながる」とした。

な質問が
出ました
学長時代の
経験につい
て、部局長
からも様々



国際化の推進、将来に向けた投資が必要であって、「一人勝

「東大一人勝ち」は学術の衰退につながる

——黒木登志夫名誉教授(前・岐阜大学長)講演会



人化の方向を決定づけた遠山敦子文部科学大臣(当時)による「遠山プラン」を「小泉改革への『攻撃的防御』で、行政改革的な大学改革がなし崩し的に進められるのを防いだ」と高く評価。「第二の『遠山プラン』」として、大学自身が高等教育の全体像を描くべきとした。

また、「東大一人勝ち」につ

さらに、「地方大学も東大が強くなることを応援している」とする一方、限られた資源が偏って配分されている現状では、研究者の流動性を確保し、学問の多様性を担保できないとして、地方大学への財政支援も必要だと述べた。その上で、東大が世界トップレベルになるためには卓越した研究と研究条件の整備、

ち」になることは必要条件ではないとした。

黒木登志夫先生 プロフィール
1960年東北大学医学部卒。東北大学酸菌病研究所助教授、東大医科学研究所助教授、教授、昭和大学腫瘍分子生物学研究所所長を経て、2001年6月より2008年3月まで岐阜大学長。近著に『落下傘学長奮闘記』(中公新書ラクレ)。

What's going on?

「行動シナリオ」

vol. 2

「行動シナリオ」の策定に向けた様々な動きを紹介します。

連絡先:本部企画グループ(内線22393)

「シナリオ」って、いったい?

「行動シナリオ」の策定に向け「行動シナリオ・プロデュース会議」が鋭意素案の検討を進めています(学内広報No.1388参照)。議論の中で、「『行動シナリオ』という言葉にどんな意味が込められているのか?」という疑問が出てきました。

ある会議メンバーがまとめた「シナリオ」の語義をもとに、議論の一端をご紹介します。

「シナリオ」の直接的な意味は、「筋書き」や「視覚的な場面の組み立て」です。ただ、その翻訳には「脚本」「台本」という語があてられます。脚や台の文字から考えると「演技や行為を根本で支えているテキスト」の意味が含まれていると言えるでしょう。以下のような含意が引き出せます。

① たんなる概要ではなく、全体を支えるようなテキストである。

- ② それぞれの場面が集まって、ひとつのストーリーをつくる。
- ③ しかしながら、基本のテキストで、その演じ方は個々のプレイヤーの個性にまかされている。
- ④ 「プラン」が目標の設定に重きを置いた表現であったとするならば、「シナリオ」はプロセスや場面のつながり、あるいは関連づけを強調した表現である。

これを前提に考えると、「行動シナリオ」には次のような役割があるのではないのでしょうか。現状では、「法人化」という形で与えられた基本構造の問題点と、国立大学法人という枠組みそれ自体の可能性についての理解がかなりバラバラになっています。「森を動かす」で濱田純一総長が述べているように、法人化を存分に活用し、東大の力を最大化し、持続可能なものにしていくためには、その理解の

バラバラな部分を調整、あるいは同期していく必要があります。

たとえば、国立大学法人化は国立大学の「民営化」「私企業化」ではなく、「主体化」つまり、大学が学問の多様性と自律性とをはぐくむ責任主体であることを明確にするものです。責任ある主体として、「象牙の塔」のように学問の自由に閉じこもるのではなく、流行に流された研究をするのでもない。

「学知」の理想の追求を通じて、人類と社会とに貢献する総合研究大学の存在意義を、東京大学の総意として掲げたい。「行動シナリオ」を通じて、こういった共通認識を醸成していくことも必要です。

「プロデュース会議」では、このような議論をしながら素案をまとめており、10月中には素案を公表予定です。ご意見はk-scenario@adm.u-tokyo.ac.jpまでお寄せください。

Contents

特集

- 02 政策ビジョン研究センター 連載開始記念拡大版 !!
06 原色『部局広報誌』図鑑

NEWS

一般ニュース

- 14 海洋アライアンス
サンゴ州島の巡検隊、真夏の沖縄で島々を巡る

部局ニュース

- 15 生産技術研究所
「東京大学 ITS セミナーシリーズ7 ITS セミナー in 柏」を開催
- 16 海洋研究所
海洋研究所一般公開を開催
- 17 大学院医学系研究科・医学部、医学部附属病院
医学部、医学部附属病院創立 150 周年記念モニュメント除幕式が開催される
- 17 留学生センター
「集中日本語コース・学術日本語コース」2009 年度夏学期修了証書授与式が行われる
- 18 医学部附属病院
医学部附属病院検診部で子ども見学デーが開催される
- 19 医学部附属病院
新型インフルエンザ対策に係る検疫業務の協力者に対し、舛添厚生労働大臣から感謝状贈呈

コラム

- 20 発掘！総長室総括委員会 第 16 回
21 Crossroad ～産学連携本部だより～ vol.46
22 インタープリターズ・バイブル vol.26
22 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第 43 回
23 コミュニケーションセンターだより No.60
23 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～

表紙写真解説

今号の表紙写真は、折り紙サークル・Orist(オリスト)の作品です。Oristは昨年、7人のメンバーで結成されたサークルで、現在は毎週、駒場キャンパスで活動しています。彼らの作る折り紙作品は多くがオリジナル作品で、表紙で紹介した作品以外にも、恐竜、動物、エレキギターを弾く若者など、「これが折り紙か！」と驚かされる作品ばかり。それらの作品は、すべて1枚の紙から折られており、どんなに複雑な形でも開くと正方形の紙に戻るのだとのこと。代表の西村光平さん(教養学部2年)は「来年からは本郷キャンパスにも活動の輪を広げていきたい」と話しています。現在、本郷キャンパス・龍岡門そばの広報センターに彼らの作品を展示中。皆さん、お近くに来られた際はぜひ、彼らの折り紙ワールドを堪能してみてください。

びっくりすること、請け合いです！



Oristのメンバー(前列左から3人目が代表の西村さん)

INFORMATION

募集

- 24 大学院人文社会系研究科・文学部
平成 22 (2010) 年度大学院人文社会系研究科入学試験日程を発表

お知らせ

- 24 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ
- 25 本部入試グループ
各種選抜要項・募集要項等の配布のお知らせ
- 31 大学院農学生命科学研究科・農学部
演習林の広報誌「科学の森ニュースNo.47」の発行
- 31 環境安全本部、本部労務・勤務環境グループ
2009 年度 東京大学メンタルヘルスセミナー
ストレスに強い「私」を作る2つのワークショップ
～参加者募集中～
- 32 生産技術研究所
第 5 回東京大学駒場キャンパス技術発表会開催のお知らせ
- 33 附属図書館
総合図書館備付け図書の推薦について(平成21年度冬学期)
- 33 大学院理学系研究科・理学部
第 65 回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 34 大学院理学系研究科・理学部
第 16 回理学部公開講演会

訃報

- 35 鈴木弘名誉教授

事務連絡

- 36 人事異動(教員)

巻末特別記事

- 38 What's going on? 「行動シナリオ」 Vol.2

淡青評論

- 40 ゼロリスク探求症候群

編集後記

部局広報誌特集の取材で、工学部広報誌『T time』の記者である学生さん・院生さんに会ってきました。彼らは自らの専門とは異なる分野の先生にインタビューを行い、高校生にも理解できるアウトリーチ記事を執筆しています。『T time』記者の頭脳にインプットされた異分野の知識は、脳内で「知の化学反応」を起こし、将来、大きな研究成果を生み出すための起爆剤となるかもしれません。本来、単なる伝達媒体である広報誌が「研究者として成長するためのトレーニングツール」になっているとも言えるわけです。「一口に広報誌と言っても、様々なスタイルがあり、それぞれ、独自の効果を生み出せるものなんだな」と新鮮な驚きを感じました。(し)



七徳堂鬼瓦

ゼロリスク探求症候群

日本人がゼロリスク症候群に侵されているという有識者からの指摘は、BSEが問題となった頃からしばしば聞かれるようになったが、その後、高病原性鳥インフルエンザや新型インフルエンザが続発する中で、そうした指摘が強まるどころか、静かに姿を消しつつあるように思われる。なぜだろうか？日本人が衛生面において過度の潔癖症であるとか、確率論でものを考えないとか、さまざまな指摘がされているが、そうではなく、耳の痛いことを的確に指摘する科学評論家が少ないことが主たる原因ではないかとわたしは思う。

ゼロリスク症候群は、正確には「ゼロリスク探求症候群」のことで、ほんのわずかなリスクの存在も許さない完璧主義者が陥りやすいという。そのような人たちは完璧をめざすため、たとえ何万分の一の確率であっても危険だと判断し不安に陥る。しかし責任の大半は、そのような性癖の人たちにあるのではなく、不安を煽ることによって彼らの存在感を示そうとしているマスメディアと産官学にあるのではないか。そこには専門家がいるので、ゼロリスクは論理的に不可能であるし、それを目指そうとするならば法外な経費が浪費されることを知っているはずだ。

しかし、万が一、問題が発生したときには相応の責任を負うことになる。それを避けるには、あらかじめ予防線を張っておく必要がある。そうすれば、たとえ問題が発生しても「わたしたちの取り組みに必要な経費が充当されなかったからこのような惨状を招いた」と言い訳できるし、大問題にならなかった場合には「わたしたちが取り組んだから惨状を招かずに済んだ」と胸をはれる。どちらに転んでも悪い話ではない。

マスメディアと産官学がこのような「ずるいゲーム」を仕掛けるのを防ぐのは、科学評論家の役割のひとつである。大学人が研究費欲しさに「ずるいゲーム」に与するのか、それともバランスのとれた学術の発展のために自制するのか、それが問われている。

林良博（大学院農学生命科学研究科・農学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1390 2009年9月17日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報グループ
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>